

---

# ええじゃないかさん

とりえなし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ええじゃないかさん

### 【Nコード】

N1219F

### 【作者名】

とりえなし

### 【あらすじ】

コメディー中心、恋愛要素ありの田舎高校での物語。変人比率が若干多めになっています。

## 第一話 朝

俺の人生でもトップスリーに入るであろう、激動の一日から一夜明け、俺は朝食をとりながら考え事をしていた。当然例の件についてである。

「……昨日のあれは夢だったんじゃないか……？」

「おい直樹。朝食中に辛気臭い顔すんな。飯が不味くなるだろうがくう、まだ姉ちゃんは帰らないのか。俺だって姉ちゃんと一緒に旨い飯も不味くなるってもんだ。主に精神的圧迫感が原因で。」

「ところで、あんた今日から弁当いらないんだって？」

「……なんですと？」

そんなことを言った覚えなんぞさらさらないんだが。こちら成長期の男子だ。いくら食っても食い足りない、ましてや購買のパンだけでは帰ってくることにすら、儘ならなくなりかねん。

「は？　だってあんた、杉田君が電話で母さんにそう伝えてたぞ？」

「」

「何！？　」

何考えてやがる、あのバカ！？

「とにかく、あんたの弁当ないから。それだけ伝えとく」

「ちょ……ええ！？」

母さんも俺に確認しろよ！　息子よりその友人を信用するってどういうことだ！？

「……義人め……あつたらとつちめてやる……」

朝から不快指数をここまで溜めてくれるとは、やってくれる……

！　台風一過だと思って洗濯をしたら、台風の目に入っただけで洗濯物が全滅した時の不快指数に匹敵するわ……！

「おい直樹、例のあの人だー。迎えに来てくれたぞー」

「……わかった、待っててもらってくれ」

くくく、飛んで火に入る夏の虫とはこのこと……。義人め……。生まれてきたことを後悔させてくれる……。！準備、着替えも完了、あとは学校に行くだけ、時間も充分……。お仕置き時間はたっぷりあるな……。

「くおらあ貴様！よくもまあ、おめおめと俺の前に姿を現せたものだな！」

「……！？……ごめんなさい、なおくん……」

「タツミ！？ どうしてお前がここに！？」

「あー、直樹、いけないんだー」

「姉ちゃん、図つたな！？」

「何のことやらさっぱり」

「とぼけるな！？ 義人の話題の後に 例のあの人 とか言っておいて悪意がなかったといいきれるのか！？」

「狙ってやったらどうだつてんだ？ ああ？」

「タチ悪っ！ 開き直りやがった！」

「あの……ごめんね？ 来ちゃって……」

「別に来るのは構わんが……用件は？」

「……一緒に登校したくって……」

「……はい？」

「ダメ……かな？」

「ひゅーひゅーお二人さん、お熱いねえ」

「黙れこの腐れ外道」

「外道らしくツーショットを撮って近所に配り歩いてやろうか」

「……勘弁してください」

駄目だ、姉者に敵う気がしない。てか勝率0%だ。

「学校一緒に通うくらいいいিদろ、とつとと出てけ」

「姉ちゃんは早く下宿へ帰れ」

「九月後半までは残って見物してやるから覚悟しとけ」

そんな嫌な覚悟したくねえよ！

「……それで、なおくん……いいかな……？」

「……義人を起こしに行くから、奴も一緒になるが……それでもいいなら許可する」

「うん！」

こうして朝の登校メンバーにタツミが加わることになったとさ。

「……若いつていいねえ……」

「年増の姉ちゃんの家でごろ寝でもしとけ」

「……」

「……ごめんなさい失言でした殺気を放たないでください……」

## 第二話 遭遇

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

「うわあああああああ！！！！！！」

なんだなんだ！？ 至近距離で叫ばれたもんだから、反射的に大声で返しちまつたじゃねえか！

「せせせ先輩！？ どうして石川先輩と一緒に先輩の家から出てくるんですか！？」

「貴様が保護者！ 朝っぱらから近所迷惑な大声出してんじゃねえ！」

「どうして！？ なんで！？ そうですねこれは夢なんですネおやすみなさい先輩、夢であえてよかったです若干……いやかなりの悪夢ではあつたんですけど！」

駄目だこいつ、聞いちゃいない。

「落ち着け保護者」

「夢から目を覚ますにはやっぱり痛みですよ、ほつぺたをつねって…… 最近の夢は痛みを感じてしまうくらい高性能なんですネ、これが現実の世界であるはずがないのに！」

「おーい、聞こえてるかー」

「先輩が石川先輩と一夜にして大人の関係になって出てきたなんてそんなことあるはずがないのに！」

「人聞きの悪いこと言ってんじゃねえ！ そんなことあるはずがないからうが！」

「ではやっぱり夢なんですねおやすみなさい」

「だからこれは現実だ！ だがお前の考えるような事実はない！ ありえない！」

「……ありえない……」

タツミがずーんと落ち込んでしまったようだが、それは置いておこう。今は保護者をこっちの世界に引き戻すことの方が重要だ。

「ならどうして先輩の家から石川先輩が出てくるんですか！」

「ただ一緒に学校に行こうって、タツミが押し掛けてきたというだけだ！ 断じて他意はない！」

「どうして先輩の家を知ってるんですか、石川先輩が！」

「……なおくんの家とは家族ぐるみの付き合いだからね……ただそれだけの話なんだよ」

お、タツミが影を落としながらも復活した。自己回復能力があると助かるな。説明の手間が省けるし。

「……じゃあ、先輩が石川先輩を家に連れ込んでにやんにやんした、ってわけではないんですね？」

「いつの時代の表現だ？ にやんにやんて……まあ、お前の考えるようなことはなかったと保障しよう」

ようやく理解しよったか。実に時間がかかる。

「……そうですね」

「なにがだ？」

「先輩にそんな甲斐性あるわけありませんよね！ いやー、よくよく考えたら先輩に女性を押し倒すような度胸があつたらこんな事態にはなつてませんよね！ 先輩は国宝級のへたれだつて言うのに！」

「……………」。

「先輩、疑つてすみませんでした、動揺してあり得ない仮定をしてしまいましたね……ってあれ？ 先輩？ もしかして怒ってます？ 顔が怖いですよ？」

「おいこら」

俺は後輩にここまで侮られていたのか。なんてこつたい。

### 第三話 拒否

「で、なぜお前がここにいる？」

まさか近所迷惑だけに來ただけでもあるまい。

「先輩、一緒に学校行きましょう！」

「断る」

「どうしてですか！？ 石川先輩はよくて私は駄目なんて……それが先輩の答えなんですか！ h 返答によっては先輩の体中の爪を剥いでムヒを塗り込み……」

「怖いから！ 恐ろしいから！ 精神的にも肉体的にも立ち直れないダメージを受けることになるから！」

「では納得のいくご説明を！」

「お前の中学とうちの高校じゃ、場所が正反対だろうが！」

保護者の中学は俺の母校でもあるからして、場所は把握している。その位置はまさにうちを挟んで正反対にあるのである。

「……あー、そういえば」

「理由は以上！」

「なら私が先輩を高校に送ってから、うちの中学に登校します！」

「意味ねえ！ そもそも時間が足りないし！」

「それは愛の力でカバーします！ だからとりあえず一緒に登校です！ 私の目の黒いうちは、石川先輩と二人っきりの登校なんて許しません！」

こいつは言っても聞かないから……こうなってしまったら、どうにかなだめすかして説得するしか……。

「……ここにいたんですか、探しましたよ」

「んむ？ 確か君は……」

「あはは……おはよう、岬」

「山本岬、と申します。以後お見知り置きを」

「これはどうもご丁寧に、俺は三井直樹……その保護者のせんぱ」



「想い人、ですね。存じてますよ」

「それで、どうして岬がここに？」

「学校行きますよ。連絡もなしに先に行くとは、どういふことかと思ってみれば」

「いやまだ先輩との話が……」

「行きますよ」

「もう少し……」

「いきますよ？」

あ、なんか迫力が……。

「もしかして岬、怒ってる？ やだなあ、ほんの些細な乙女心が生み出した産物というか……」

「ルリの先輩さん、この子は借りていきますよ」

「先輩、ダメです！ こう見えて岬は怒ると凄いです！」

「どうぞ持つてってください」

「先輩！？」

「それでは」

「あー、せーんーばーいー！」

「ああ、古木さんが連れ去られていく……」

「これでよかったんだ、これで……」

「そんな戦隊物のラストみたいなセリフで閉められても……」

「いい友達をもったな、保護者……」

「それじゃなおくんが保護者みたいだよ……」

うむ、タツミは偉いな。数少ない突っ込み役として、これからも頑張ってもらわなくては。

## 第四話 昼飯

「旦那、俺は思っわけだよ」

「何をだ。この裏切り者。貴様が原因で昼飯がなくなってしまったのをどうしてくれる」

朝っぱらから、よくわからん出来事が続いたが、一番の悲劇はこれで決定だ。その根本である義人は、今は俺の手によって足が地から浮いている。ちょっとは苦しいはずなのにとり乱さない義人はさすがだ。常日頃、義人の姉さんからもつと酷い教育（という名の虐待）を受けてきただけのことはある。俺の渾身の脅しも、いつものと比べれば、子猫がじゃれついてきた程度の認識にしかすぎないのだろう。どれだけ痛みに塗れた少年時代を過ごしてきたんだって言う話だが、実際問題やつには動揺の欠片もないのだから困る。

「なおくん、落ち着きなよ……」

こういったことに慣れていないタツミは、おろおろするばかりで何もできないようだ。何かされても困るが。

「冷凍食品に彩られた昼食をとるのは悲しいことだと思わないかね」

「んぬ？」

「冷凍食品には食品添加物が多く含まれている。その食品添加物は旦那の体に染み込んで、将来旦那の障害になるのはほぼ必定！」

そんなことを無駄に熱いテンションで述べられても困るんだが。

「確かにうちの母さんの作る弁当は冷凍食品が大半だが……それを理由に俺に購買のパン派になれと？ 購買のパンにだって保存料くらい使われてるだろ」

そもそもあの戦場で十分な量のパンが捕獲できるとは思えない。今まで購買でパンを買うことなど、練習で死にかけた後、人がいなくなっってから買うくらいしかなかったので、歴戦の勇者たちと違って経験値が低い。その経験値の低い俺が昼のピーク時に購買に挑むなど、レベル10くらいで大魔王ゾーマとの決戦に臨むようなもの

だ。無謀すぎる。

「そこで提案するのが手作りの弁当だ！」

「朝から自分でそれを作れと？ 朝からそんなことしてる時間もないし、親に頼むのも気が引けるな」

「そこで紹介するのがこちら！」

「通販か」

「旦那を想ってくれている、心憎い後輩に作ってもらっ愛情たっぷりのお弁当だ！」

「はあ？」

「……いや、だからさ、今日保護者ちゃんに会わなかったかね？」

「会ったな」

「何か渡されなかったかね？」

「渡されてないな」

「…………」

「…………」

「ではまた来週」

「まてや」

「ああーっ……！！！」

「うるさいですよ、ルリ」

「愛妻弁当、先輩に渡すの忘れたあ！ そのためにわざわざ先輩の

家に行ったのに！」

「それはご愁傷様です」

「うわーん、やけ食いしてやるー！」

「太りますよ」

「…………」

「聞こえないふりしなくても……」

#### 第四話 昼飯（後書き）

絵が……上手く……なりたい……。

## 第五話 オーディオ

「なおくんっていつも、どんな音楽聞いているの？」

「なんだ藪から棒に」

「いや、なおくんっていつもイヤホンを耳につけてる印象があるからさ。移動中はともかく、それ以外の時にも」

確かに、目上の人と話するとき以外は、たいていつけているかもしれない。

「一万五千円もしたからな、このオーディオは。元は取ってくれないと困る。それに、だ」

「それに？」

「やかましい奴から話しかけられて、会話をしたくない時には、これを付けていることでスルーすることができる」

「やかましい奴？」

「旦那、どこのどいつだ？ 旦那に対して口やかましく何度も話しかけてくる奴というのは」

「自覚症状なしにその言葉を発しているなら、脳外科に急行するのを勧める」

「まあ、俺なわけだが」

「わかってるじゃねえか」

「当然。俺は旦那の好きな漫画から、もっとも恐れているものまで熟知しているからな」

なんて嫌な情報通だ。記憶操作して抹消したい。こう、頭を思いつきり殴ったら記憶飛ばないかな。斜め四十五度くらいから叩いたら、義人の脳みそも昔のテレビみたく調子が多少良くなるかもしれない。

「でも旦那は律儀にも、俺のボケには毎回反応して突っ込みを入れてくれるではないか」

「ほっておいたらどこまでも増長するだろうが。貴様は」

「わかってるなあ、流石生れながらの突っ込みマシン」

「人を突っ込み以外に能のない機械扱いするなよ！」

ぐだぐだと義人と話していると、タツミが思いついたように聞いてきた。

「じゃあ、杉田君はなおくんの趣味嗜好を知ってるの？」

「おう、好きな漫画はラストイニング（野球漫画。スピリッツに掲載）に学園革命伝ミツルギ（ギャグ漫画。絵が綺麗）。もっとも恐れているのは実の姉さん（理由は言わずもがな）だが、他に何か知りたいことはあるかね？」

「俺の個人情報駄々漏れ！？ プライバシーの侵害になるから黙りやがれ！ しかもっとも恐れているものはお前も一緒だろうが！」

「いや、全世界の姉を持つ弟がそうだと思うな、うん」

「……そうなのか？」

「いやいや！ そんなことないからね！？ なおくん正気に戻って！？」

「……とまあ、旦那の恐れているものは実の姉さんなわけだ」

「ふむふむー、なるほどー」

「石井も急に出てきて、人の個人情報を収集してんじゃねえよ！」

「人生何事も勉強だよー」

「その知識が将来役立つことなんてないから！」

「……脅迫材料ー？」

「さらっと恐ろしいことぬかしてんじゃねえよ！」

## 第六話 音楽

「それで、本題なんだけど」

「ん？ 本題？」

「だから……いつもどんな曲を聞いているかって話」

ああ。そういえば、もともとそんな話から始まったんだっとな。

義人とか石井が話に交じるとすぐに脱線するから困る。奴らは修正しようとしなから、そのまま話が続き。

「その質問には、旦那の親友にしてほとんどを知りつくすこの俺が答えよう」

「世間では人の弱点を周囲に言いふらす人間を親友というのか。初耳だ」

「石川さん、知りたいだろう？」

うわ、自分に都合の悪い話はスルーかよ。音楽聞いて、聞こえないふりをする俺とどっちが悪質なんだか。

「……教えてくれる？」

「本人がいるところで他の人に聞くか」

「まずは…… もう恋なんてしない」

「古っ！」

「君がいるだけで」

「古っ！」

「神田川」

「時代がさらにさかのぼった！？」

「関白宣言」

「ねえ！？ ほんとに！？ 杉田君、からかってるんじゃない？」

「旦那、本人から返答を」

「……好きで悪いか」

「本当だったんだ！ 事実なんだ！」

……なんかその言い方には棘があるな。昔のものはいいものが多

いのに。

「最近の邦楽は大したのがないな。昔はよかった……」

「何その老人が昔を懐古するみたいな感じ！？ いったい、なおくんは何歳！？ 高校生の感覚じゃないよ！ もっと青年らしくしようよ！」

「ああ、でも洋楽も聴くな」

「どんな？」

「カーペンターズとか」

「だから古いよ！」

「ビートルズとか」

「ねえ、何なのそれ！？ 狙ってるの！？」

「だってよう……最近のバンドとかうるさいばかりで似たり寄ったりにしか聞こえんし……」

「若者の発想じゃないよそれ！」

「俺には旦那の気持ちがわかるな」

「そうなの！？」

「90年代のアニソンは神がかってたからな」

「それはなんか違うと思う！ よく知らないけど！」

「そうだよー。セイバーマリオネットとかー、いい曲が多かったよねー」

「だがタツミ、温故知新という言葉もあることだ。古いものの価値を知ることは有益だぞ？」

「それなら最近の曲の良さも知ろうとしようよー！」

「……面倒じゃないか」

「言ってること矛盾してるよ！」

「あ、でも結構最近の曲も知ってるぞ？」

「……なんて曲？」

「……おしりかじりむし、とか？」

「微妙に古いジャンルがなんか違う！ 高校生らしくない！」

「崖の上のポニョ、とか？」



「だからどうして偏ってるかなあ!？」

「タイトル知ってて、店とかでかかってる曲ってこれくらいだし」

「だから守備範囲が狭いよ!」

「それは違うぞ、タツミ。俺は九十年代の名曲やフォークソングに  
関してはたいいていの人よか知識があると自負してる」

「守備範囲が広いんだか狭いんだかわからないよ!」

## 第六話 音楽（後書き）

読者さんの中に自作の四コマ（絵とか構図は下手くそ）見たい人います？いるならミクシイにでも載せますが。

## 第七話 五七五

「残暑が厳しいですねえ」

確かに、九月も後半なのに三十度近く気温があるのはきついですね、健三さん。

「こんなことでは授業に身が入らなくなるのも必然と言えるでしょう」

それでも授業を受けるのが高校生の宿命なんですよ。

「主に私が」

健三さんがかよ！

「……クーラー効いた部屋で酒でも飲みたいですねえ、今」

給料もらってんだから、税金分くらいしっかり働いてください！

「誰か！ 私に酒を持つてくる勇氏はいませんか！」

未成年！ 俺たち見成年！ しかも授業中に堂々とサボろうとしないてください！

「やる気がなくなったので、授業以外のことをやります。いつも通りあなた方は私を楽しませることに心血を注いでください」

二学期になつてもやりたい放題だなこの人は！ テスト範囲を順調すぎるペースで終えてるからといって、これでいいのか！？

「今の気持ちを五七五で表してください。ではまず清水」

突っ込み入れる暇もねえ！

「人間は どうしてお腹が へるのかな」

腹減ってるのか清水！？ さっき購買のパン何個か食ってただろ

うが！ 昼前なのに！

「次、深谷」

「おかしくね 十二連勝 ありえんて」

授業中に巨人の連勝について考察！？ 今まで授業何受けてたんだよ！？

「杉田」

「おかしくない 他の球団 弱いだけ」

なんか会話始めたこの二人！ 巨人ファンと中日ファンの争いが始まったのか！？

「次石井」

「ぽーによぽーによポニヨ 魚の子ー」

空気読んでねえー！ しかも何これ！？ 五七五ですらないよ！  
今の気持ちもわからないよ！ 何がしたいんだお前は！？

「なるほど…… 中国古典文学には名作が多いので、日本人ももっと積極的に読むべきだと思うのですか」

ポニヨの歌にそんな意味が込められていたのか！？ 暗号！？  
誰かつつこめよ！

「いえー、トイレに行きたいのでー、許可を求めたのですがー」  
「そうですか。どうぞいつてらっしゃい」

しかも意味違った！ なのに健三さんピクリとも表情を変えてないよ！ なんだこの異空間！？ 飛び出してえ！

「次は玉野、どうぞ」

「パルプンテ いいから起きろ パルプンテ」

何があつたんだ玉野！？ 打開したいのか！？ どうにもならない事態にあつて、その事態を打開したいのか！？

「もう少し詳しく、もう一度玉野」

「数学の 今日の宿題 まだ未完」

ただ提出できないのをどうにかしたかっただけかよ！ あれか！  
？ サッティーが宿題出していたことを忘れるとか、そういう奇跡を起こしたかったのか！？

「ダメな生徒ですねえ」

あんたが言うな！ 教師として駄目だからな健三さんも！

## 第八話 五七五 続き

「第八話 ネタは続けて 五七五」

なんか事情説明から始まつちやった！

「最近の 趣味はひたすら 眠ること」

寂しいなその趣味！ いや別にいいんだけど！

「いい天気 担任教師は 能天気」

上手いこと言わなくていいから！ それともこれは皮肉か！？

「兄弟は いいから俺に 姉妹くれ」

授業中に何考えてんだこいつは！？

「どう見ても 三井君受け ありがとう」

何をどう見ればそういう結論に！？ 俺はノーマルだからな！？

変な妄想のおかずにしないでくれよ！ ……え！？ もう手遅れ

！？

「タツカラプト ポップルンガ プリットパロ」

ポルンガ（ドラゴンボールに出てくる神龍の凄い奴）を呼び出す

呪文だと！？ そうまでして何をかなえたいんだ！？

「サッティーよ 宿題のこと 忘れるよ」

また玉野かよ！ しつこいよ！ そこまで嫌なら初めから宿題や

つてこいよ！ 玉野が宿題忘れるのなんていつものことじゃねえか！

「健三さん 今戻りました トイレから」

石井、戻ってきた報告までやる必要ないだろ！

「そうですか 自分の席に 戻りましょう」

健三さんも返した！？

「ああもうす ぐ授業おわる な次はひ」

ただ思ってることを無理に五七五に合わせようとしなくていいか

ら！

「……ふう、それでは今日の授業をこれで終わります。お疲れ様でした」

最後まで　グダグダだったな　この授業　（三井心の一句）

「授業も終わったことだし、反省会と行こうか」

「ああ、巨人の連勝はどう考えてもおかしい。何かやってるのは明白」

「ふん、これだから捏造好きな中日ファンは……」

「同一リーグの下位チームからエース、四番、守護神を引っこ抜いてまで勝とうとする金慢チームは言うことが違うな」

……あつちは野球で盛り上がってるな。セリーグファンって仲悪い印象があるけどどうなんだろう。

「わかってないな！　あの強気さが受けに回るところが萌えるんじゃない！」

「でも、どっちに回ってもオツケーだとは思わない！？」

「いや、このクラスには受けが圧倒的に不足しているからして……」

……なんだろう、あつちの話題を理解してしまったら、人として終わりの気がする。

「まったく、おかしい人たちだよー」

「お前が言うな石井」

ポニョの歌とトイレとどう関連があるんだ。五七五でもないし。

「……放尿ー？」

下品なオチを付けるんじゃない！

## 第九話 暴走

昼休み。本来なら弁当を食うか、宿題をやるか、図書室で読書でもしているのだが、今日は少しばかりいつもと事情が違う。

「……ひもじい……」

「旦那、そう落ち込むなよ」

「黙れこの厄病神が。誰が原因でこの悲しい事件（俺の昼食抜き事件）が発生したと思ってやがる。反省してお前の昼飯をよこせ」  
「断る」

「少しくらい分けてくれたっていいじゃないかよう！」

「だってもう早弁したし」

「いつの間に!？」

「じゃあパンを奢れ。お前にはそれくらいの義務がある」

「財布忘れた」

「お前ってやつは!」

「そういう旦那は？ 購買でパン買ってくればいいじゃん」

「……できるならそうしとる。今日は朝からごたごたしてたせいで俺も財布を忘れたんだよ」

くう、こういう日に限って。タツミが朝から押し掛けてくるなんてイベントさえなければ、ここまでひどいことにはならなかったものを……。

「……アイム、ハングリー」

「言葉にしたら少しは空腹が紛れたか？」

「まぎれるわけなからうが!」

ああ、怒鳴るとますます空腹が……。

「ねえねえ辰美」

「……………」

「最近私太っちゃってさー」

「……………」

「ダイエットしようにも、味覚の秋だしー、どうしようかと思ってさー」

「……………」

「……三井君ってそこそ顔いいし、告っちゃおっかなー」

「……にや、にやに!？」

「動揺しすぎ。……って安心しなタツミ、冗談だから、がくがく揺すると会話が成り立たなくなるでしょーが!」

「……冗談? 本当に冗談?」

「私はあんたと張り合おうとか思ってないから。趣味じゃないし」

「……よかった……………」

「心底ほつとしたみたいね……まあいいや。で? そんなに気になるなら、タツミの旦那に弁当でも分けてあげたら?」

「ただ旦那!？」

「動揺しすぎだって。杉田君だって三井君をそう呼んでるでしょうが。過剰反応しすぎだぞ? 何かあったか?」

「……………」

「いや、黙られると何かあっただろうと邪推したくなるんだが」

「それに食べさせてあげるなんて早すぎるよ!」

「そこまでも言ってるから」

「……でも……それくらいなら……………」

「そんなことクラスのだ真ん中でやられたら、普通逃げ出したくなると思うけど」

「少しくらい、大胆になってもいいよね…………?」

「……青春だなあ……。若々しいわ」

「……あの、ちょっと……なおくんのところ行ってきていい?」

「はいはい、いつてらっしゃい」



「……あの様子だと……告白したんだろうなあ……」  
「ねえねえ、何かあったの？」  
「タツミが告白したっぽい」  
「ついに!？」  
「本当!？」  
「面白そうだし観察ね!」  
「「当然」」

## 第十話 気持ち

「……体力が……残り少ない……」

「旦那のHPが赤く点滅しているわけだな」

「HP言うな。しかし、もう動くのも億劫だ……」

無駄な動きは死につながりかねん。できるだけ派手な行動は避けるように……。

「そういえば今日の部活は陸トレだよな。筋トレをどれだけやらされることやら」

「……これ以上気が滅入るようなことを言わんでくれ……」

「いかん、マジでそんなことやったら力尽きるぞ……」。

「なおくん、……ちよつといいかな？」

「タツミ？ 用件なら手短に頼む」

今日の体力は、できる限り使用を制限したい。

「私のお弁当、少し分けてあげようかなって」

「あなたが神か！」

「いやいや、そんな大げさなものじゃないよ！」

そんなことはない。今の俺にとっては、タツミの姿が神々しく見える……っ！

「私ごときにできることがございましたら、何なりとお申し付けください、美しいお姫様」

「うわー……旦那がプライドとかその他もろもろを投げ捨てて……」

……

「黙れ、災厄の元凶が。プライドでは腹は膨れないのだよ。」

「ええ！？ お姫様！？ そんな、私……なおくんに……」

「旦那、石川さん真に受けてるぞ。昼休み終わる前に飯食えよ？」

「……そうだな。馬鹿なこと言っていないで、このおにぎりもらってもいいか？」

飯食う時間なくなるし。

「はっ！？ どうぞどうぞ！」

タツミもトリップから戻ってきたようだし、小さめのおにぎりを口を含むと

「むぐう！？」

「……どうかな？ お弁当は毎朝私が作ってるんだけど……」

「……………」

「結構自信作なんだけど………どうかな？」

「……一言いいか？」

「なに？」

一呼吸おいて、感想を述べた。

「味が濃ゆい！ こんな食ってたら生活習慣病になるぞ！」

そう。タツミのおにぎりには、これでもかというほど塩が入っていたのである！

「味が濃い方がおいしいと思うんだけど……」

「そんなレベルじゃない！ これはあれか！？ 高カロリーで血圧を上げようとしてもしてるのか！？」

「朝は低血圧だけど、そんなことしないよ！」

「なら改善しとけ！ 数年後泣きを見ることになるから！」

「……じゃあ、このお弁当はいらないよね……」

「いや」

文句は言うが、それでも今の俺にはカロリーが必要だ。

「この弁当はありがたく分けてもらう。……その礼に大抵のことは聞いてやるう」

「え……」

「確かに味はあれだが、それでもタツミが俺にくれたというその優しさは十分に受取ったからな」

「旦那、くっせー」

「やかましいわHENJINが」

「HENJIN!？」

## 第十話 気持ち（後書き）

あー、笑う犬おもしろかった。また復活しないかな、内Pとか上々とか笑う犬とか。

## 第十一話 危険

「旦那旦那、そういえば昨日こんなものを見つけたんだが」

そう言つて義人は、バッグから何か小さいものを取り出した。

「なんだそれは……？」

少しばかり警戒しながら、義人の手の中にあるものを覗き込んだ。かつて何度か馬鹿馬鹿しいトラップを仕掛けられ、見事はめられた苦い経験があるため、慎重な対応である。

「そんなに警戒心をあらわにしないで」

「お前らには煮え湯を数え切れんほど飲まされてるからな。これでも足りないくらいだ」

「ちよつと待つてよー、杉田はともかくー、僕まで一緒にされるのは心外だなー」

「いやいや、俺が混ざつてる方がおかしいだろ」

何言つてやがるんだこいつらは。

「俺から見れば二人とも同類だ。昔から義人にやられているのは確かだが、石井と会つてから悪化したのもまた事実だからな」

「ひどいなー」

「ああ、まったく」

「今までの行動を思い返してからその言葉を吐くんだな……。で？ 義人は何を発見したんだって？」

話がそれかけたので、軌道修正。

「そうそう、こいつを見てくれ。どう思う？」

「……デジモンか？ また懐かしいものを……」

「ブブー、外れ」

「じゃあなんだよ？」

「ヨーカイザーだ」

「懐かしいなあ、おい！」

ヨーカイザー。デジモンペンデュラム とポケモンを合体

させたような、万歩計の形をしたゲームである。時代が時代なので、知りたい人はヤフーでもグーグルでも調べてくれ。記憶から抹消されかけていたものを、よくもまあ見つけ出してきたものだ。

「今は東海地方を旅してる」

「しかも今になってまた始めたのか!？」

「ヨーカイ、ゲットだぜ!」

「確かにそんなゲームだけど、そのフレーズはやばいつて!」

「バトルの前には振りますモンモン」

「それゲームが違うから! そっちはデジモンだから!」

「まあ、デジモンもたまごっちの二番煎じも同然だし」

「いろんなところから苦情が来るようなこと言うんじゃない!」

「世界は模倣の上によって成り立っているのだよ」

「それはある意味正しいが、ここで使うのは間違ってる!」

「アイデア? パクられたのに気がつかない方が悪いんだよ」

「模倣大国、中国が貴様は!」

「……旦那、色々とまずい気がしてきた」

「今さら!? 俺はさっきから冷や冷やもんだよ!」

「中国人はクレヨンしんちゃん是中国で作られたものだと思ってる  
とか、言わないようにしておこうな」

「……堂々と口に出してるじゃねえか!」

## 第十二話 発見

「……それでは、今日の部活はここまでだ。お疲れ」

「終わったあああ」

何が悲しくて、大会が終わって自由なはずのこの時期に長距離走＋筋トレ地獄を味わわれなければならないのだろうか……。シーズンオフですよ？ 水泳部ですよ？ バカ広いこの学校の周囲（一周二キロ超）を走らんといかん理由などあるだろうか？ 否、ない！

「これから部活の度にこんなことさせられてたら体が持たん！」

「おお、そこまで言うからには小倉さんに直談判してくれるのだな」  
「……人生、諦めが肝心だと思うんだ」  
「弱っ！」

だって、あんな筋肉ダルマに直談判したところでメニューが変わると思えんし。夏は実際変わらなかったし。頭の中身まで筋トレで筋肉に変えたに違いない、あの先生は。

「まあまあ、せっかく部活も終わったことだし、帰って体を休めようではないか」

「そうだー、この前ー、面白いものを見つけたんだー」

「何を？」

「知りたいー？」

「その言い方をされたらな。気にならないって言ったら嘘になる」

「じゃあー、教えてあげようー」

「イッシー、それはどこにあるんだ？」

「帰り道の途中だよー」

ふむ。おもしろい店でもできたのか？ うまいラーメン屋とか。

「食べ物関係か？」

「おおー、三井さえてるねー。その通りだよー」

予想通りだったのか。これじゃあ、実際に見てもあまり驚けないかもしれないな。

「さあー、一緒にそこに行ってみよー」

「着いたよー」

「はあ？」

連れられて来てみたはいいけど、特に新しい店舗は見当たらない。しいて言えば、昔からある焼き肉の店（某飲食人気店紹介番組にも取り上げられたことあり）くらいだろう。

「おいおい、新しい店なんてないじゃないか」

「んー？ 僕新しい店を見つけたなんて言っていないよー？」

「飲食関係って言ってただろ？」

「うんー。だからあそこー」

そう言って、石井が指し示したのは……

「自販機？ これのどこがおもしろいんだ？」

「しっかり見てよー」

「しっかり……？」

「……っておい！ なんだこの自販機！？」

「ねー、面白いでしょー？」

「この田舎都市にどうしておでん缶の自販機が！？」

「どこかの企業が設置したんでしょー？」

「購入者層がわかんねえよ！」

ちなみにレパートリーは豊富で、おでん缶のみならずパスタ、ラーメン缶も入っている。値段は三百円、四百円である。

「……誰が買うかわかんねえよ……」

「僕は全種類買ったけどねー」

「……ちなみに味は？」

「そこそこだったなー」

「そつか……って義人！？」

「なんだよ旦那」



「いくつ買うつもりだ!？」

「たくさん」

「お前アホだろ!？」

購入者層はこういう変人なんだろうな……と実感してしまった。

### 第十三話 学び舎

ある休日の午後、俺と義人はかつて毎日のように通った塾の前に来ていた。

「ここに来るのも久しぶりだな……」

「神田先生は元気かね？」

北高に合格するため、義人たちと共に精進してきた塾。その風貌は以前と変わらない様子だった。

「しかし中身も一緒だとは限らん」

「実際に見て確かめるのが吉だな」

義人の言う通りだ。勝手知ったる嘗ての学び舎。ずかずかと遠慮なく入っていった。随分と騒がしいので、授業はまだ始まってないらしい。

「あれ……三井先輩に杉田先輩!？」

「俺たちの名を知っているとは……何奴!？」

「義人、そんなノリ必要ないから。……えーっと、お前は……、そうだ! 井上だな!」

「……今、名前忘れてませんでしたか？」

「宗平、仕方ない。旦那は役に立たない知識は覚えていない主義だから」

「フオローになってませんって! 結構ひどいこと言ってますからね!？」

「まあまあ、俺に免じて許してやってくれ」

「三井先輩も同罪です! いやむしろ先輩の方が元凶で、重いからいですよ!」

まったく、無礼な後輩だ。中学の水泳部時代に、もっと躰けておくべきだったか。

「また何か失礼なこと考えてません!？」  
鋭いな。

「ところで、俺たちがここに来たのは用事があるからなんだが……」  
「先生呼んできますか？」

「いや、別にいい。こっちから先生のところ行くから。客として呼ばれたわけでもなんでもないからな」

「神田先生は職員室か？」

「たぶん……今の時間なら。ただ、他の生徒が質問とかに行ってるかもしれないですよ？」

「そうだとしたら待つさ」

「……用事があるんでしょう？」

「用事は金井先生とは関係ない、別件だ。ただ挨拶だけはしとこうと思ってな」

お世話になったし、久々の再会だし。

「旦那がお礼まいりをしたいらしいからな」

「しねえよ！」

「……でも先輩、ここだけの話ですけどね？」

「なんだ後輩」

「先輩二人の話は、神田先生がよく授業の小ネタに使ってますよ？」

「聞いた」

「ここだけの話じゃないな」

「誰から聞いたんですか？」

「「保護者」」

「……最近、妙に嬉しそうなのはそういうわけですか……」

「な、何のことだ？」

「旦那、動揺が見え見えだぞ」

「古木とようやく付き合いだしたんですか？」

「付き合っていないし、ようやくつてなんだよ!？」

「……昔からアプローチかけまくってたじゃないすか」

「……そうなのか？」

「旦那、少しは気づけよこの鈍感」

## 第十四話 恩師

井上と別れ、職員室に着いた俺たちは、生徒の質問に答えている神田先生を発見した。神田先生も俺たちを見つけたらしく、質問を切り上げて俺たちの相手をしてくれた。

「お久しぶりです、神田先生。ご無沙汰しました」

「お久です先生。ああ、別に御茶菓子とかはいりませんよ？ ただ、もしどうしても俺に御馳走したくてたまらないというなら別です。歓迎してくれるというなら、ありがたくその気持ちと品物はいただきます」

「御茶菓子とか歓迎とか、そんなこと言ってねえだろ！ いきなり図々しいわ義人！」

「だからいらないうって言っただじゃん」

「もの欲しそうな目で見ておいて、よく言っわ！ もらおうって気満々だろうが！」

「半年ぶりだというのに、変わらんーお前らは」

再開早々バカな言い争いを始めた俺たちを見て、神田先生は目を細めてそう言った。俺たちがここに通っていた時期を思い出したのかもしれない。あの時期は……あれ？ もしかして今とあんま変わってない？ 特に義人とか。

「どうだ？ 高校生活は上手くいってるか？」

「義人を筆頭に、変人の集団に囲まれて窒息死しそうです。何か病原菌を持っているのではないかと、常識人の俺は疑うほどで」

「旦那たちと順風満帆に、楽しい学園生活を送ってるから心配しなくっていいですよ」

「そうか、それはよかった」

「なんで！？」

「ちよつと先生！？ 聞いてました！？ 悪性のウイルスが蔓延してる北高で、唯一まともだと言っても過言ではない俺が苦しんでる

「って言ってるんですよ!？」

「いやでも血色いいし」

「若いから当たり前です! 血色とかでなしに中身の方……精神状態がいつぱいいつぱいなのがわかりませんか!？」

「直樹は突っ込みを入れてるときが一番生き生きしとるな」

「そうなんですよ。突っ込みドランキーとでも申しましょうか」

「なるほど、それは重症だ」

「二人して、なに人を病人に仕立て上げようとしてるんですか!」

「だって、病んでるんだろ？」

「ああ言えばこう言う……」

「ところで二人とも。お前らのやり取りとかを授業中ネタに使ってるから。構わないよな？」

「構いますよ! 他の奴らに聞きましたけど、なんてことしてんですか!」

「そうですよ!」

義人、もっと言ってやれ!

「著作権は俺たちにあるんですから、費用を払っていただかないと」

「そこじゃねえよ!」

「ふむ、今のやり取りもネタにさせてもらおう」

「エサ与えてどうすんだ!」

## 第十五話 とばっちり

近況報告から無駄話まで、様々な話をネタに再会の喜びを分かち合っていた俺たちと先生だが、授業開始の時刻が迫ってきた。

「おお、もうこんな時間か。授業始まるから、用事があるなら早めに言ってくれ。なんなら授業後でも構わんが」

「それがですね、用事というかお願いというか……」

先生への頼み事を口にする、驚くことに即断で許可をもらえた。

「いいんですか、こんな簡単に？」

「いいかどうかは、むしろこっちがお前らに聞きたいくらいだ。どうしてこんなことを？」

「後輩に頼まれましてね」

「……だれかは知らんが、いい先輩をもったな」

「……というわけで、今日授業を手伝ってもらう、お前らの先輩にあたる直樹と義人だ。質問があつたら俺だけでなく、この二人にも聞くように。この二人は現役北高生だから、中学レベルの問題なら大抵答えてくれるだろう。科目は問わずにな」

神田先生が塾の生徒たちへの説明を終えると、教室はにわかになぜわつき始めた。まあ、去年まで同じ中学に通っていて、顔くらい合わせたことがある（義人は良くも悪くも校内では顔が広く、有名人だったためその人数はかなりの量）だろうから仕方がないといえば仕方がない。保護者に関しては、まるで見てはいけないものを見たかのように口をパクパクとさせてい絶句している。酸素を求める金魚かあいつは。

「ど、ど、ど」

あ、ようやく言葉が出るようになったらしい。……しかし、ど？

「……どういうことですかこれは　　っ！！！」

保護者はパニックを起こしていたらしい。起こすのは構わんが、狭い教室で大声を出さんでくれ。響くから。塾にも近所の住人にも迷惑だから。塾がこれで周りときくしゃくしだしたら、どう責任をとるつもりなんだ全く。

「えー、騒ぐな。特に瑠璃。隣の席の宗平が死にかけてるから」

かわいそうに、何の関係もない井上は耳がどうにかなくなってしまったらしい。「……とんだとぼっちりだ……」などとぼやいているが、それも当然だろう。犬にでも噛まれたと思って笑って流してもらうしかない。

「流せませんよ！」

おっと、生暖かい目で見守っていたが、井上の方はさすがに理不尽だと感じているらしい。

「確かに宗平には何の責任もないかもしれない。しかしながら、世の中には不可抗力というものがあつてだな……」

「少なくとも今回の事件は防げました！　先輩が古木に一言前もって声かけとけばよかったんですから！」

「ソレハキツカナカタナー」

「嘘だ！　違和感ありありじゃないですか！　あからさまに不自然です！」

「だって恥ずかしいじゃないか！」

「その結果がこれですよ！」

それを言われると、ぐうの音も出んな。

## 第十六話 臨時講師

神田先生の数学は、わかりやすくてもおもしろいと評判である。俺たちも中学のころには、そのわかりやすい説明で実力を伸ばし、この地域の進学率ナンバーワンの高校　つまり北高への入学を果たしたのだ。もっとも、入学するまでは北高が　教師も生徒も変人ばっか　な常識はずれな高校であるとは知らなかったのだが。……それはともかくとして、神田先生が恩人であることには変わらない。「そこで俺たちは、保護者の勉強を見るついでに神田先生の手伝いもできないかと考えたわけだ」

「その結果思いついたのが、このような形での授業のフォローというわけだ。理解できたか？」

「……わかりましたけど……」

保護者がねちねちと不満をこぼすので、詳しい説明に当たったのだが、どうも保護者には不満があるらしい。

「……先輩に勉強を教えてもらう約束は確かにしました。でも、もつとこう違う……なんていうか、もつとこそばゆいような青春のページに刻まれる感じというか、そう言う感じのを期待してたんですよ……」

「聞きとれんぞ、質問があるならもつと大きな声で聞け」

「……例えば先輩が私の部屋に来て、一対一、マンツーマンでの個人授業をしてくれるとかですネ……」

「おーい、聞こえてるか保護者？」

「……いくら教師と生徒という立場とはいえ、若い男女二人っきりで部屋にいます。先輩が私の解答の間違いを指摘するたびにかかる吐息。触れあう手と手。ついには我慢をし切れなくなった先輩が私に襲いかかり……」

「ぶつぶつぶつぶと、病んでるのかお前」

「……私も多少抵抗はするんですが、所詮男と女の体力差にはかな



わず、そのまま……。でもでも私もまんざらではなくて、最終的に二人は愛を誓う……みたいな甘々な展開を期待してたのに！」

「わっ！？ 急に大声を出すな！ どうかしてるのかお前は！？」

「全て先輩のせいです！」

「何が！？」

文句があるならはつきりと言ってもらわんと困る。質問がわからないのに答えようもなくそもないんだから。

「いいですよ別に！ 先輩にムード作りとかを期待しようってのがそもそも間違いなんですから！」

「勉強を教えるのにムードが関係あんのか！？」

「あります！ それはもう大いに！ むしろそっちメインで頼んだんですから！」

「……ええー、もう全く意味わかんねえよ……」

理解しがたきは女心と秋の空ってか。

「もういいです！ 先輩！ ここはどうやって解くんですか！」

「やる気になったのか？」

「二人つきりが駄目なら、先輩は私に個人授業をしてください！ それくらいいいでしょう！」

「いや、他にも教えんといかん後輩いっぱいいるから」

義人に負担全部押し付けるつもりか。いくら奴でもそのうち泣くぞ。

## 第十七話 適材適所

「先輩……いや先生、質問があります」

「なんだ保護者。わからんのか？」

「どうして私の心臓の鼓動が高鳴っているのでしょうか？」

「心臓に関する病気の疑いがあるな。病院行って、精密検査受けてこい」

「少しくらい構っていてもいいじゃないですか！」

「お前は勉強ができるんだから、むしろ他の奴らに教えてやれ。そっちの方が建設的だ」

「それじゃあ先輩が来てくれた意味がないじゃないですか！」

「そもそも、お前の学力なら十中八九北高には入れる。ケアレスミスとかさえなければ」

そしてケアレスミスに関して言えば、俺の近くにいる義人というアホには遠く及ばないため計算に入れる必要はないだろう。……たぶん。

「じゃあケアレスミスしても受かるくらいまで、私の学力を向上させてください！」

「……ならこの問題でも解いとけ」

このまま押し問答を続けたところで、時間の無駄になるとしか思えないので、問題を押し付けて保護者のもとを去った。他にも教えてほしい後輩などいくらでもいるはずだから、一人に時間をそんなにかけるわけにもいかんし。

「せんぱーい、ここわかんないんですけどー」

「ああ、ここはまずこっちの角度を求めてからだな……」  
「なるほど！」

「そうするとこっちがこうなって、補助線入れたらもう簡単だろ？」  
「わかりました！ ありがとうございます！」

うん、これだよこれ。俺が求めてたのはこんな感じ。決してコン

トをするためにここに来たのではない！

「さあ、わからない問題があればがんがん聞いてくれよー」

「はい先輩、ここがわかりません！」

「保護者以外で」

「教える生徒を選ぶんですか！ 横暴です！」

「お前の質問には一度付き合ってやったるうが。他にはー？」

「ああ、もういいぞ直樹」

「あれ？ もういいんですか先生？」

「お前がごたごたやってる間に、俺と義人であらかた質問を片付けたからな」

衝撃の事実！

「いやー、義人は教え方がうまくて速いな。教師に向いてるぞ、うん」

「それほどでもあります」

……俺は、この分野においては義人よりもかなり劣っているらしい。

「先輩、人間には長所も短所もあるんですから、別にいいじゃないですか」

「間違いなくお前の相手をして後れをとったってのがあると思うけどな俺は！」

「生徒に責任をなすりつけるとは、見下げ果てた教師ですね。先輩は教師になったら絶対だめですよ」

「別にいいわい！ どうせ教師になるつもりなんてないからな！」

## 第十八話 日常

今朝もなぜだか二人の女子が、うちの狭いリビングの椅子に腰かけていた。

「……誰に断つて家に上がってんだ、お前ら」

「私が許可したに決まっているだろうが、この愚弟が」

……うん、まあそうではないかと感じてはいたけどね。むしろ確信に近かったし。

「あのですね、先輩。今日こそは私の弁当を食べてもらおうと、持ってきたんですよ」

「家庭的な女の子か。奥さんにしたら、さぞ献身的に尽くしてくれるのだろうね」

その言葉に、保護者は明らかに過剰反応を示した。

「そ、そんな！ 奥さんだなんて！ まだ早すぎます！ 私たちは清く正しい交際を……」

「まだそんな関係なんぞもつとらん！」

「まだって！？ なおくん、古木さんのことが満更でもないんじゃない？」

「そっという意味じゃない！」

「確かに確かに近い将来そうなる可能性は高いですが、それでも私にだって心の準備が……」

「お前はいつまで妄想しとるんだ！？」

「ふんふん、それでそれで？」

「姉ちゃんも煽ってるんじゃないよ！」

ああもつ、今日も朝から騒がしい！

「……では先輩、お元気で……」

「じゃあな」

「……対応が冷たいですよ、先輩」

「たかだか学校に行くくらいで、今生の別れのようなセリフを吐くお前の方がおかしいわい」

「テイク2です」

「やり直したと!？」

自由なやつだ。義人に影響されたんじゃなかるうな？

「……では先輩、お元気で……」

本当に最初にやりがった。……このままさっきと同じ対応をしたら、テイク3に突入するんだらうな……。

「……また会えるさ……」

無限ループは歓迎できないので、それっぽいセリフを選んでみた。我ながら立場が弱いと言わざるを得ない。

「その、精魂こめて作った弁当を私だと思って……」

「食べるってか？」

弁当に感情移入しても、することは一つだろ。

「もう！ なおくんいやらしいよ!」

「ええ!？」

何想像したのこの子!？ 顔真つ赤にしたお前の方がいやらしいよ！

「私、先輩に初めてを奪われちゃいました……」

「なおくん!？」

真つ赤になっていたタツミの顔は、今度は急に青ざめてしまった。また別の想像をしてしまったらしい。

「初めての手製弁当をお前から渡したただけだろうが！ 誤解を生むような発言は慎め!」

「ちよつとくらい、いいじゃないですかー。じゃあ先輩、また後で」

後でっていつだ。学校行くんだから、今日はもう会わんだろ。

「……なおくん」

「どうしたタツミ？ そんなに近くに来られたら、自転車に乗れんのだが」

「……本当に古木さんに手を出してない？」

「まだ疑ってたのかお前！？」

## 第十八話 日常（後書き）

日常おもしろいですよね。

……漫画の話です。

## 第十九話 吾輩は

授業も一段落し、やる気がなくなったらしい健三さんは、表情を変えずに言った。

「さあ、今日も始めましょうか雑談シリーズ」

ついにシリーズとか言い出したよこの人！ 雑談にシリーズもくそもないだろう！ まあ楽しみにしている人は結構いるかもしれんが！

「本日のお題は 吾輩は猫である」

……？

「元千円札が描いたこの小説ですが……」

わかりやすいけど、それは敬称には当たらんだろう。

「ねこたんの部分を、自分のことに当てはめて、面白おかしく変えてください」

たんをつけるな、たんを。

「それではさっそくいつてみましょう。いえー、ぱふぱふー」

無表情でそれを言っても、盛り上がりには欠けますよ。

「まず清水」

「吾輩は神である」

いきなりスケールでかいよ！

「玉野」

「吾輩は模範的優等生である」

優等生は宿題提出を毎回忘れたりしないから！ 忘れようとはも

つとしないし！

「深谷」

「吾輩は野球部である。レギュラーではまだない」

一年だしな。頑張れ。

「副会長（女子）」

「吾輩は……キューピッドである」



そう言つて、タツミの方を振り向くとにやりとした。……不気味だ。キューピッドとはあんな邪悪な笑みを浮かべるものなのか。

「菅原」

「吾輩はただの男女のカップリングには興味ありません！ この中に、男同士で付き合う（物理的な意味で）がいたら私のところまで来なさい！ 以上！」

なんか混じつてるし！ それ夏目漱石じゃねえ！ 谷川さんだよ！そして男同士で付き合う（何を付き合うかは自主規制）関係なんてこの中にはいない！ たぶん！

「次」

「吾輩はこの広い大空に翼を広げゆきたい」

だから何！？ 中学校の合唱か！

「ねくすと」

「吾輩の今日の朝食はベーコンエッグマフィンである」

知らないよ！

「つぎ」

「吾輩は両刀使いである」

いた                   ！ 菅原さんが望む人いた

！

「剣道部で二刀流を使う人は、吾輩意外にまだない」

違った！ 意味が違ったよ！ 今俺凄く恥ずかしいことになった！

「次で終わりにしましょう。最後三井」

俺ですか。

「……吾輩はこの学校唯一の常識人である」

「「「ぶーぶーぶー」」」

「大ブーイングですと！？」

どうやら、俺はそう思われていなかったらしい。

「はいもつと大きな声で！」

「「「ぶーぶーぶー」」」

「つてお前義人！ 貴様が扇動してんじゃねえよ！」



## 第十九話 吾輩は（後書き）

今まで読んでくださった読者さんには申し訳ないですが、この小説の更新を止めようかと思っています。

それというのも、他の小説と比べ文章力がないこともあり、アクセス数は頭打ちになり、他作品と比べての評価が低いことがはっきりしたからです。これ以上こんな気分で書いても面白い作品が書けるとも思えないため、更新は中止させてもらいます。

こんな駄文を読んでくださった方々、本当にありがとうございます。た。

## 第二十話 昔話（前書き）

評価欄、ミクシイ、メッセーじなど様々な場所での応援のコメント、  
ありがとございました。なりかけていた鬱も多少良くなったので、  
不定期更新という形でまた書かせていただきます。

## 第二十話 昔話

「どうしてあんな甲斐性皆無鈍感突込男を好きになったんですか？」  
「久しぶりの登場なのに黒すぎない？ 岬。無理があるよ、その読み方は」

中学校からの帰宅途中、親友である岬はとんでもないことを質問してきた。

「いえ、気に障ったなら謝りますが、ルリは成績優秀にして、顔も可愛い部類に入ります。体つきは（失笑）あれですが」

「……持ち上げてから落とすのはやめてくれないかな？ 露骨に失笑されると、さすがの私も怒りを鎮められそうにないよ？」

「失礼しました。体つきは残念ですが」

「真顔で言いなおされるのも、相当腹が立つなあ！ しかもオブラートに包んだところも言っちゃってるし！」

「あんな鈍感な三井先輩以外でも、ルリなら選り取り見取りでしょうに」

「まあ、確かに告白されたことはあるけど……」

「よければ理由を教えてくださいますか？」

「待った。それなら先輩のところに行ってからにしよう」

「なぜですか」

「……聞えよがしに自分のことを話されたら、先輩でも私の話が気になるでしょう」

「かもしれないね」

「そこで聞き耳をたてる先輩に、私の健気さを存分にアピールするって寸法よ」

「……姑息ですね」

「なんとも言いなさい。それに、他にも聞きたがってた人もいるからちよつどいいし」

「他にも……？」

「先輩、お疲れ様です」

「……なぜお前がここに？」

陸トレが終わって、グラウンド（プール兼部室からは徒歩五分かかる）から帰ってみれば、部外者がいる。よくもまあここまで図々しく育ったものだ。親の顔が見てみたい。

「……ってお前が保護者か。うっかり」

「なにか失礼なこと考えてませんでした？」

別に考えてない。なぜなら保護者が保護者なのは自明のことだから。よってこれは失礼ではない。

「……まあ先輩が無礼なのはいつものことなのでスルーの方向で」

「お前も失礼だな」

「なおくん、五十歩百歩って知ってる？ 因果応報とか」

「それで、今日ここまで来たのは昔話をするためなんですよ！」

「ばーん、とない胸を張って偉そうにふんぞり返った。」

「昔っていつの話だ？」

正直興味がわかないんだが。

「私が先輩を好きになった経緯です！」

時間を聞いたら内容が返ってきた。日本語は正しく使え。

「……あほか。そんなこと聞きたい奴なんかこの部室の中にはいな

」

「お、面白そうだな」

「……知りたい、かな……」

「それはよかったよー。三井のデータは収集しておけば何かの役に立つかもだしー」

この部室にはおかしい奴しかいないのか。

## 第二十一話 未来

「……それで、この人たちですか、聞きたがってた人というのは。初めまして。ルリの親友、山本です」

「健三さんの娘さんだよねー、知ってるよー。来年はうちの高校に来るみたいだねー。成績もいいみたいだしー」

「……………」

おお、あの子石井を不審者だと認識したようだ。あからさまに警戒してる。

「ああ、健三さんがいつも話してるしな。反抗期で辛いんです、だから今日は授業はここまで。……………」とか」

「私はさぼりの口実にされているんですか……………」

……………なぜだろうか。俺はこの子に近いものを感じる。……………苦労人体質、みたいな。

「もしもーし、いいですかー？ 説明始めますよ？」

「健三さんの愛娘さんー、黙ってもらえるー？」

「人が話をするときは、静かに聞くのがマナーだよ？」

「そうだぞ。来年は高校生ならそれくらいの節度は……………」

石井もタツミも義人も聞く気満々だな。そしてとばかりを受けた健三さんジュニア、ドンマイ。そういう星のもとに生まれついたと思っただけなんだ。俺もそうしてるから。

「……………なぜに三井先輩はそこまで達観した表情を浮かべていられるのですか……………」

「それはひとえに経験の差かな……………」

まぶたを閉じれば浮かんでくる、不条理に降りかかってくる災難の数々。よくここまで道を踏み外さずやってこれたものだと思う。

俺ってすごいと思うよ、実際。

「そうですね。それはご愁傷様です。そんな経験頼まれたって受けたくはありませんが」

「……いや、近い将来、君は確実に似たような経験を積んでいくことになるだろう……！」

「なんて嫌な予言ですか。迷惑この上ない」

顔をしかめ、困ったような顔をする健三さんの娘。だが、彼女は少し誤解をしているようだ。

「予言？ そんな胡散臭いものではないよ。……これは確信だ」

「革新……？ 根拠でもあるんですか？」

動揺したようだ。根拠？ そんなものは決まっている。

「君がこの高校に入学するであろうこと。保護者<sup>トラブルメーカー</sup>が親友であること。

そしてそれに耐えうる、日ごろ培われた精神力。……君も薄々感づいてはいるんだろう……？ このまま奇人にまみれ、突っ込みに明け暮れる日々が来ることを……！」

「うっ……それは……」

認めたくない現実を認めてしまったのか、膝をつく健三さんの娘。

ふふふ……ここにまた一人、優秀な人材が暗黒面へと……

「なおくん、古木さんの話が始められないから黙って」

……真顔でたしなめられた。怖い。何気にタツミが、この話に一番興味を持ってるんじゃないか……？



## 第二十二話 回想

「……………。あれは私が小学三年生のころになります……………」

当時から よくできる子 として、周囲の大人たちや男子から、ちやほやされていた私は、その実同級生の女子からは妬みの対象とされていました。中学に入学してから出会った岬のような親友もおらず、教室内ではいつも孤立。プライドの高かった私は、自分から友達を作ろうともせず、ただ無意味な毎日を過ごす生活を送っていました。

しかしそんな私に転機が訪れます。それは言うまでもない、先輩との交流の始まりです。

「ん？ でも保護者とは通学団一緒だったよな？」

「旦那、低学年の頃から女子と話さなかっただろ？ 旦那には同じ通学団といえど交流なんてな気に等しかったじゃん」

「それもそうか。…………でも待てよ？ それならどうして俺は保護者と話すようになったんだったっけか…………？」

「やっぱり忘れてますね…………。いいです。今から思い出させてあげますから」

その日、私は兄のソフトボールチームの観戦及び応援に駆り出されました。興味もなかったのですが、特にやることもなく、親に兄の弁当を持って行くことを頼まれ、仕方なく行ったというのが実情です。しかし、それが私に大切なものを与えてくれました。

先発した兄と相手投手、二人の好投で最終回まで両チーム無得点

のまま進みますが、力尽きた相手投手を打ち崩した兄のチームが勝利を収めました。しかしその結果が気に食わなかったのでしょうか。兄の妹であると察した相手投手は、私を人目のつかない林の中に連れていったのです。兄のチームメイトが誰かなど覚えていなかった私は、兄に呼ばれていると言われ、疑問を抱くことすらなかったのですからお笑い草です。

「……いや、小三で警戒心バリバリの方が不気味だ」

人間不信にすぎるだろ。同じ小学生同士ならなおさら。

「それでも万が一のことがあってもおかしくはありませんでしたから。それに小三の頃の私から見れば小六男子は大人に近い存在でしたし。本当に危なかったんですよ、その時は」

その男は大声でがなりたて、私の髪をつかんだ上、強い力で引張ってきました。男女の力の差、小六と小三の体格差もあり、私には抵抗らしい抵抗ができませんでした。周りに人などいない。助けを求めても届かない。そんな恐怖感も手伝って、私は惨めにも泣き出してしまったのです。

「しかしそんな絶望的な状況の中、ヒーローのように現れたのが先輩だったのです！」

「……………」

なんだろうか。うつすらと思いだしてきたような……。

## 第二十三話 守護

涙でかすむ私の目の前に颯爽と現れた先輩は、敵わないことを知りつつ勇敢に立ち向かいました。しかし小学生の二年生差は、当然の如く先輩を苦しめます。先輩は顔や腹、体の至るところを殴られ、蹴られるなどの暴行を受けます。それでも、倒されても倒されても幾度となく立ち上がる先輩にいら立ちを覚えたでしょう。その六年生は先輩にこう問いかけます。「なぜそこまで無謀なことをするのか」と。すると先輩はこう答えます。「女子供は男が守るものだろう」

「涙で曇ってはいましたが、その時の先輩は輝いて見えました。その時に思ったのです。私はこの人に着いていこうと」

「ふーん、そんなことがあったのか」

「杉田君も知らなかったの？」

「俺はソフトボールはやってなかったしな」

転校初日からうちに来るような、天上天下唯我独尊幼なじみ義人でも、接点がないところはあるのである。大体その時って……

「で、その後はどうなったの？」

「私は巻き込まれ、気絶したのでその後の展開はわかりません。しかし再び目が覚めた時にはその六年生はもうおらず、傷ついた先輩だけが残されていました」

「……………」

「まだ髪が少し痛みましたが、それ以外私に目立った外傷はありませんでした。きっと先輩が守り抜いてくれたんでしょう」

「……………」

「あれ、どうした旦那。急に黙っちゃって」

「嫌なことでも思い出したー？」

……ええ、その通りですとも、はい。

「実のところどうだったんだ、旦那？」

それは。

「……手も足もでなくて、死にかけたところを救ってもらった……」

「ああ、大人に？」

それならどれだけよかったものか。

「……うえ」

「ん？ なんだって？」

「……親愛なる姉上様に救ってもらった」

その小学六年生は、心と体に大きな傷を負ってお帰りいただきました。……以前そいつとふ偶然すれ違った時の恐怖の表情は忘れられん。きつとトラウマになってるんだろうな……。

「よかったじゃん」

「よくねえよ！」

貴様は女の子一人守りきれんのか、とむしろそれまでに負った傷よりも、姉ちゃんの拷問の方がダメージが大きかった。……あれがキレたら、夜叉も裸足で逃げ出すんじゃないだろうか。俺は足がすくんで逃げることにすらできんだろうけど。

「……あ。そういえば、旦那はなんでそもそも人気のない林の中にいたんだ？」

「む、そうですね。どうしても都合よく登場できたんですか？」

「……」

「答えられないのー？」

人気がない、人から見られることのない場所ですること  
なれば答えは一つ。 と

「……立ちションしてた」

「……」

……  
五人の冷めた視線がいたたまれない。

## 第二十四話 勇者ミツイの冒険〜離脱編〜

旅は順調に進み、俺たち勇者一向は、魔王退治のためレベルを上げようと必死で努力していた。俺のレベルが十二、ヨシトのレベルが十五、イシイのレベルが十四であり、まだまだ魔王に挑むには力が足りない。俺たち三人は勇者として困った人を助けながら……。

「っておい！ 一人足りない気がするぞ！？」

「旦那のレベルが一番低いことには触れないんだな」

「うるさいわ！」

くっ、人には誰にでも触れられないものがあるというのに、空気読めよ。スルーしろよ。俺の名誉を保たせろよ。

「大丈夫だ旦那。旦那のプライドなんて塵に等しいから」

「無礼この上ないこと言ってんじゃねえ！ 経験値だけ稼いでほとんど戦わなかったお前らのレベルが高いなんて詐欺だろ！」

「人生なんてー、そんなもんだよー。要領よく立ち振る舞った方が勝ちって言うかー」

……ちくしょう。かなりムカつくな、このシステム。

「それはさておいてだ！ ケンゾー（最強の遊び人）はどこに消えた！？」

いつの間になくなってたんだ！？

「ああー、ケンゾーならー、「職場環境が悪いので辞めさせていただきます」とだけ言い残してー、帰ってったよー」

「そんな簡単にパーティって抜けられるものなのか！？」

衝撃の事実である。俺に何の相談もなしにパーティから抜けられるとは。そんなにカリスマ性がないのか、俺。そしてバイト感覚だったのか、健三さん。

「勇者一向への勧誘の文章は 世界のためになる、やりがいのある職場です とかだったからな」

「ずいぶん怪しい勧誘だなあ、おい！」

怪しすぎて、そんなとこ普通の感性ではいこうなんて思わないだろ！ 文章考えたやつ、どうかしてるっての！

「自分の実力が上がっていくのが実感できます とも」

「そりゃあレベルが数字として表れるからね！」

事実ではあるが、魅力が感じられん。

「でもー、このまま三人でパーティを組むのもおかしい話だよなー。四人で組んだ方が楽しー」

「勇者と遊び人三人っていう今までのパーティも十分おかしかったけどなー！」

「なら、次の街で新たなメンバーを探すことにするか。それでいいか、旦那？」

「次の街への道中で、レベル上げも兼ねてな」

「一番レベル低いのはミツイだけだねー」

「それを言うな！」

しつこい奴め。

「いいんだよ！ これから俺はガンガンレベルを上げてやるから！」

「一緒に行動している以上、俺たちのレベルも上がるわけだが」

「しかもー、このままのペースなら僕たちの方がずっと早くレベルが上昇するしねー」

「……遊び人のくせに」

## 第二十四話 勇者ミツイの冒険〜離脱編〜（後書き）

久しぶりの投稿です。一ヶ月も更新なしですいません。なぜか今さらフェイトやリトルバスターズEXにはまっていたもので……。恨むならゲームを貸してきた友人二人を恨んでください。

……いや本当にすいません。



## 第二十五話 続・勇者ミツイの冒険（前書き）

十時間耐久カラオケで変なテンションになりました。今後は自重せねば。

## 第二十五話 続・勇者ミツイの冒険

旅を妨害する様々なモンスターを退け、俺たち勇者一向は新たな街へとたどり着いたのだった。

「いやー、三人のパーティーだと戦闘はきついねー」

「そうだな。まともに戦えるのが旦那だけってのが問題なんだよ。構成をもっとよく考えるべきだったんだって」

「……貴様らがそれを言うか……」

敵モンスターを挑発するだけしておいて、実際の戦闘では計算できないお前らは、めんどくさい存在である。

「たまに大ダメージを与える時もあるじゃん」

「確かに。無駄にすばしっこいササキとかいうモンスターを、トランプを手裏剣にして倒したのには驚愕した」

「それだけでも僕たちを雇ってるかいはあるよねー」

「……すさまじく割に合わんよ」

ああ、もっと俺の力になってくれる、まともな人材はおらんのか

……。

「……い、嫌です……やめてください……」

「ん？」

三人で話しながら歩いていると、大通りからは少し外れた道から、今にも消え去りそうな声が聞こえてきた。

「おい、二人とも。なんかきな臭いぞ」

「これは行ってみるべきだな」

声のした方に向かうと、そこは薄暗い袋小路だった。そこには、一眼見ただけで襲われかけていたとわかる、白い服を乱された一人の女の子と三匹のモンスターの変態がいた。

「ヨシト、イシイ、やるぞ！」

「りようかい」

「御意ー」

「……はあ、はあ……」

なんとか二匹は倒したものの、こちらも深手を負ってしまった。

……それというのも、ダメージを受けそうになるたびに俺を盾にしてくれやがった、遊び人二人がいるからなのだが。

「……薬草は？」

「むしゃむしゃ」

「ばくばく」

「てめーら大して傷を負ってないのになけなしの薬草使ってんじゃねえ　！」

ドス。

「ぐはあ！」

突っ込んでる隙を狙われ、俺はまさに死の寸前まで来てしまった。

「……もうあの王に馬鹿にされたくないってのに……」

死ぬたびに「情けない」などといわれるのは、もうまっぴらごめんだ。しかしこのままでは……。

「　」

「！？」

何か声がしたと思った次の瞬間には、重かった体が軽くなった。

「つあああああ！」

急に傷が治ったことを考える間もなく、襲ってきた最後の一体を返り討ちにする。なんとかこれで死は免れたようだ。

「……しかしなぜだ？」

「その理由を推測するにだねー」

薬草を食って血色豊かな遊び人が解説しだした。……こいつら、いつか絞める。

「君がやったんだな？」

「……はい」

そうして返事をしたのは、先ほど襲われていた少女だった。

## 第二十六話 続々・勇者ミツイの冒険

危険が去ったので、質問タイム。

「いえーどんどんー」

「ぱふぱふー」

「やかましいぞ遊び人一号と二号」

あー、鬱陶しいことこの上ない。こいつらは真面目な話をさせようという気がないのだろうか。

「なあ、俺が一号だよな!？」

「僕が一号に決まってるよねー、勇者ミツイー」

「ええ!？ そこに食いつくのか!？」

しかも二人揃ってとは、シンクロ率何パーセントだ。どこぞのロボットにでも乗って、使徒を倒してくればいいのに。……あ、魔王を倒す旅の途中で、俺たちは。

「…… ヴァはロボットじゃないんだけど……」

「ん？ 何か言ったか謎の少女」

「…… なんでもないです」

そうか、俺の変人センサーが反応したように思えたが、気のせいだったか。……ここ最近、フルで作動しっぱなし（つまりは出会う人間すべてが変人）だったため、バカになったか。こんな娘が変人なわけないよな。

「それで、お前はいつたい何者だ？」

回復させてくれたことから見ても、畏でなかったことがわかる。だからといった的でないといいきるには早い。何が起るかわからないこの世界、石橋を叩いて渡るくらいの気概は必要だ。

「旦那は細かいことを気にしすぎなんだよ。仲間にならないか」

途中いろいろ端折って勧誘しちゃった！

「え……？ あの……？ はい……？」

「動揺するのもわかるけどねー」

黙れ。お前らが動揺などするはずもないだろう。だから動揺したくなる気持ちなどわかるはずもない。

「……私は一体何をしたら……？」

「そうだな、とりあえず……」

「魔王を倒そう」

「ええ！？」

だから話をややこしくするんじゃないよ！

「……なるほど。名前はタツミで、職業が白魔道士見習い。パーティが壊滅状態にあつて、かろうじて逃げ出したものの追い詰められていた、と」

「私はまだ見習いで、敵を倒すとかそういうことはできないんです

……」

「しかしあの回復魔法は効果覷面だったな」

「うんー、うちのパーティに来れば即戦力間違いないよねー」

「役立たずが二人いるからな」

「おやおや、手厳しい」

……なんか腹立つ。

「まあ、よければ一緒に旅に来てくれないか？ もちろん強制じゃないが」

「……………」

「ただ、俺個人の希望としては一緒に来てほしいかな」

「……はい、そこまで言ってくれるなら……。一緒に行きます」

ほほを染めつつ、パーティに加わることを承諾してくれた。これでこれからの旅が少し楽になるかもしれない。

「ミツイは しょうじょ をてにいった！」

「なんだそのいかがわしい言い方！？」

## 第二十六話 続々・勇者ミツイの冒険（後書き）

感想でおだてられて小説を書く自分。……あれ！？ 上手く乗せられてますか！？

## 第二十六話 属性（前書き）

忙しいのになぜか投稿です。暇な時には書かないのに……アホですね。



## 第二十六話 属性

小倉先生の監視下で、今日の筋力＋陸上トレーニングが終了した。  
……最近<sup>……</sup>は筋肉痛のひどさが以前より辛くなっているとは……。いや、痛みに耐えられるようになったただけなのか？ それとも俺はMなのか？

「おーい、旦那どうした？」

「……いや、何でもない」

大丈夫だよな。昔から外傷には慣れていたものの（姉という名をもつ人外生命体の日常的な暴力のため<sup>わきのじゅげん</sup>）、それを喜びに感じるような変態には育っていない。

「どうしたのー？ そんなに疲れたー？」

「……まあ、いろんな意味でな」

「それはちょうど良かった」

「……？ それはどういう……？」

そう言いながら部屋に入ろうとすると、

「……お帰りなさい先輩……だにゃん！」

頭にネコ耳を付けたバカがそこにいた。

「……………」

「……先輩？ どうかしたんですか……だにゃん」

「……………」

「大丈夫ですか……だにゃん」

無言で振り返ると、目をそらしつつ口笛なんぞを吹く馬鹿二人。

「……お前の頭が大丈夫か、保護者……」

昔から変な奴だと思っ<sup>……</sup>てはいたが、ここまでおかしかったとは。

「え、でも杉田先輩と石井先輩が「旦那は動物が好きなんだ。特に小動物」「古木さんー、このネコ耳カチューシャを貸してあげるよ

「。意味はわかるねー？」って言うから、つい……」  
「ついじゃねえよ。」

「……貴様らには、俺に平穏を与えようという優しさはないのか……？」

「まったく心外だな」

「僕たちなりの優しさだったのに」

「部室に来るなりどつと疲れが増したのにか。これがあれか、互いの感情がすれ違う状態ってやつか。」

「それで先輩、どうです……？ 似合ってますか……？」

「どうもこうも俺に変な属性はない」

「でも動物が好きって……？」

「それは事実だがそれとネコ耳とは越えられない壁がある！」

「なぜそこを同一に扱うのだろうか。俺はネコ耳萌えーはあはあとか言ってる一部の特殊な人たちと同一視されてるのか。」

「……だとしたら早急に改善が必要だな……」

「……あれ、先輩……？ 怒ってます……？」

「さあどうだろうか。」

「あ、あれー？ どうしたの三井ー？ 襟首なんてつかんでー？」

「そうだぞ旦那、暴力はいかんぞ？」

「貴様ら三人、黙ってそこに正座しろ」

「お前らには俺がいかにもな人間か分かってもらうため、じっくり話を聞いてもらわんとな。……別の名を説教とも言っが。」

「……というわけだ。わかったな？」

「ハイワカリマシタ」

「……先輩は常識人です……」

わかってもらえたようだなによりだ。

そして後日。

「……なおくん、どうかな……だわん」

「義人、石井　　っ！！！」

「え！？　ネコがいけなかったんじゃないのか！？」

「そこじゃねえよ！！！」

## 第二十八話 作戦会議

とある秋の昼下がり。女子数名で騒がしい机周辺にて。

「辰美ってさー、三井君のことが好きなんだよねー？」

「……うん、まあ、そうだけど……」

「それにしてもアプローチが弱いと思うんだよね、押しが足りないよ押しが」

「そうそう、よく言うでしょ？ 押しが駄目ならもっと押せって」

「そこは引こうよ、ね？」

「その結果、現在に至ってるんだからね？」

「それを言われると弱いんだけど……」

「だいたい三井君もあれだ、こんな可愛い子が消極的ながら迫ってるのに、付き合おうとしないなんて……やっぱり杉田君との噂は事実なのかな？」

「それはないよ！ たぶん……」

「まあよく聞かれてるけど、断固として認めないからねー」

「……その言い方だと、なおくん×杉田君は確定事項なんだね……。認めてないからって……」

「それはそうでしょう！ でも杉田君×三井君かもしれないけど」

「いやいやそこは……はっ!？」

「どうしたの？ ここから議論が始まるうかというところで……」

「待つて！ これは罠よ！ 私たちは今何をしようとしていたの!？」

「何って、受け攻めの議論を」

「そこがおかしいのよ！ そもそも私たちは辰美を三井君とくっつけようと集まったんじゃないの!？」

「……そこは盲点だったわ……」

「……あの、ただ雑談してただけで、私となおくんが付き合うとかそういう話し合いでは始めからなかったよう……」

「恐ろしい罠ね……こうやって魅力的なネタをちらつかせておく」とで、第三者の深い介入を防ごうとしていたんだわ……」

「敵ながら巧妙な手口ね。感服するわ」

「……いつの間になおくんが敵に……？」

「だけどその程度の罠に引っ掛かる私たちじゃないわ！」

「自分で勝手に罠を作って掛かっている感じが否めないんだけど……」

「……だけど、三井君はどんな子が好きなんだろう？」

「そうね、辰美は何か知らない？ 好みのタイプ」

「……そんなこと恥ずかしくて聞けないよ……」

「ピュアだなあ辰美は。日常会話……むしろあいさつで聞けるレベルだよ？」

「そんなことどうやって……？」

「「おはよう三井君、杉田君とはどっちが受けなの？」って感じで質問内容変わってる！」

「おつといけない、また罠にかかるところだった」

「まあそれはともかく、簡単だった。聞いてきなよ」

「今すぐ!？」

「善は急げって言うでしょ？」

「でもでも、心の準備が」

「大丈夫だって！ 性癖まで聞けとは言わないから！」

「もともとのハードルが高いよ!？」

「だから聞かなくていいって」

「あーもう、もどかしい！ 私が言っただけ聞いてくる！」

「ああ、ちよつと……。辰美の練習にもなったのに……」

「……そんな直接的な質問、もしぜんぜん違う……美人なお姉さんが好きだったなら立ち直れなくなるよ……」

「心当たりでも？」

「……なおくんのお姉さんがそんな感じなんだよ」

「シスコンじゃなけりゃ大丈夫だって……お、帰ってきた」

「聞いてきたよー」

「で、詳細は？」

「俺はホモでもバイセクシャルでもねえ！」だって

「また質問内容変わってるよ！」

## 第二十八話 作戦会議（後書き）

明日明後日と二日続けてプレゼン発表。忙しい時に限って書くのはアホですね。我ながらよくわかりません。

## 第二十九話 専門家（前書き）

感想を頂いたので、ひっそりと書きました。  
それではどうぞ。



## 第二十九話 専門家

「敵を倒すにはまず、敵の情報を集めなければならない!」  
「おおー」

「……だから何でなくんが敵扱いに?」

「最終的には辰美が墮とすからに決まってるでしょうが!」

「明らかに不穏な言葉が聞こえてきたんだけど!」

「ということで、彼奴の弱点を知ろうと思う」

「どうやって?」

「それはね……」

「専門家の皆さんをお連れしました」

「どうも、旦那の知識に定評のある杉田です」

「同じくー、三井行動研究家ー、石井ですー」

「いや知ってるけど……」

「でも辰美、私たちよりも三井君のことを知っているのは確かでしょう?」

「それはまあ……」

「そうだよー、僕たちがついていけるからにはー、大船に乗った気分になってもらって構わないよー?」

「タイタニック号に乗ってる気分で優雅にしてくれ」

「沈むとしたいの……? 不安を駆り立てるような……」

「じゃあサントアンヌ号」

「ポケモン!」

「じゃあー、咸臨丸ー」

「イッシー、何それ?」

「勝海舟が船長をやってたー、江戸末期に外国に行った船だよー」  
「勝海舟って?」

「子供のころー、犬に金　ま噛みつかれて死にかけた人だよー」

「全く凄い人だと思えない!？」

「……いや、女子がこれだけいる中で、そんなはしたないこと言わないですよ……。もっとオブラートに包むとかさ……」

「じゃあー、睾丸ー」

「……もういいや、どうしてここまで話が脱線したんだろう……?」

「ともかく、旦那の趣味嗜好に関して言えば、俺たちほど詳しい人物はいない!」

「……その割にはこの前失敗したよね……」

「その件についてはー、忘れるのが吉だよー」

「そうだワン」

「……忘れさせる気ないでしょ?」

「ワンー」

「ワン」

「辰美、顔真っ赤にしてどうしたの?　そのワン、ってのに何か関係が?」

「……後生だから聞かないで……」

「第一回、旦那に好かれるためのイメージ作り会議ー」

「わーわーわー」

「……」

「さて、旦那が好むものの傾向だが……」

「明らかに引いてるのにスルーした!？」

「旦那は王道を好んでいるんだ。あれでも」

「王道?」

「そう王道……。しかも悲劇じゃない、ハッピーエンドな感じの王道だ」

「……それが何か関係あるの?」

「そうだよー。そのためにー、石川さんには性格矯正を行ってもら  
うよー」

「性格矯正……?」

「それではこの台本を手にとって」

「?」

「こんなセリフが違和感なく出るようにして、旦那に突入するんだ」

「……ええ!? 何このセリフ!?」

「さあー、頑張ってー」

「これがいい結果を生むとは考えられないんだけど!?」

「成せば成る」

「たぶんならないよ!」

「やらなかったら映像が流出するかもワン」

「最終的には脅迫!? ただ面白がってるだけじゃ!?」

「……………」

「……………」

「せめて否定の意志は示してよ!?!」

### 第三十話 実行

昨日義人から「明日は旦那一人で歩いて登校しろよな、俺も石川さんも用意あるから（笑）」とのメールが来た。その文章のどこに笑える要素があるというんだ。あれか、馬鹿にしているのか。「俺たちはお前と違って忙しいんだ、いいよな暇な人は。うらやましいぜ（笑）」的な（笑）なのか。そうだとしたら義人とは一度じっくり話し合う機会を設けないといけない。

まあ、それはさておき今日は久々に一人で、しかも歩いて登校する。義人の命令に従うのもバカ臭いが、常日頃はよく話す奴らがいるので、こういう機会は珍しいかもしれん。じっくり登校するかな……などと考え、徒歩通学したのが運の尽きだった。……もともとあつてないような運なのが悲しいところだが。北高への道を半分ほど行つたところだった。

「い、いつけな―い。ちこくちこく―」

……よく聞き覚えのある声が、物凄い棒読み（これ以上はないほど。例えるなら声優経験のないアイドルが外国映画に吹き替えたレベル）で聞こえてきた。

「……何やってんだ、タツミは……？」

用事があるんじゃないのか？ それとも、それで遅刻だと騒いでいるのか？ そんなことを思いながら声がした曲がり角付近に行く  
と、

「えい！」

「ぐはあ！？」

なんか勢いよくぶつかってきた！？

「……何してんだお前は……」

ぶつかった拍子にタツミから飛んで行つたものを見て、一瞬思考が停止する。

……なぜに食パン……？

「……………」

「……………」

よし、状況を整理してみよう。

1 義人からメールがきて、一人で学校に歩いて行けと指定される。

2 指示通り歩いて行くと、いないはずのタツミの声（棒読み）がする。

3 見に行ったら、激突。

4 周りには食パン。

なんだこのカオスな状況。

「…………… あっ、い、いったーい、どこ見てるのよー」

「…………… どこって、まあ、お前を見ようとしたんだが（あまりに不審だったから）」

「えっ、私を…………… 見ようと……………？」

いや別に深い意味はないが。

「それはそうと、急いでるんじゃないのか？」

ちこくちこくー、と声に出していたくらいだ。理由は知らんが何かあるんだろう。

「そうだね……………。うん、行ってくる……………」

何と無くボーっとした状態のまま、タツミは学校へと向かっていった。

…………… あまり急いでいるように見えないのは気のせいなのだろうか。

「まあ、とりあえず……………」

こんな不自然なことが起こるのは、馬鹿が暗躍しているからだろ  
う。悲しいことに今までの経験から、それはほぼ100%なのであ  
る。

### 第三十一話 趣味

登校後。教室にはすでに、例の二人が来ていたので質問を浴びせてみる。内容はもちろん今朝のタツミの言動についてである。

「義人、少し話があるんだが」

「俺は何もしてないぞ」

「……………」

「石井、お前にも」

「僕は何も知らないよー」

「……………」

なぜこいつらはこうなんだ…………。

「…………正直に答えるバカ」

「おいイツシー、大変だ。旦那の語尾がバカになってしまったぞ」

「これは一大事だねー。このままじゃ面接試験の時に「趣味は何ですか？」と聞かれたら「街頭で配っているティッシュをいかに多く摂取するか記録を競うことですバカ」となってー、面接官の印象が悪くなっちゃうよー」

「バカって言ったのはお前らに対してだ！ 語尾じゃねえよ！ しかも趣味は何ですかってお見合いか！？ ティッシュ配りの摂取なんて趣味にしてるわけじゃねえよ！ 使えるただのものは断らない主義なだけだ！」

「使えるとはいやらしいな、旦那」

「ティッシュをそっち方面と絡めるんじゃないよ！」

「わー、三井が怒った」

「逃げるぞイツシー」

そう言い残して、無駄に素早い動き（机があるにも関わらずの高速移動）で廊下へと去っていった。

「行ってしまった…………」

しかしあの様子では、あいつらが関連しているのは間違いないだ

ろう。問題は中身だから、現状問題が何一つ解決していないのは悩ましいところだが。

「……………」

「……………」

「……………」なぜだろうか、今日は妙に見られている気がする……………。  
落ち着かない……………」

「三井、何かあったのか？」

「……………災難？」

「なんだ、いつものことか」

原君の対応が冷たい。

「杉田君に石井君、朝言われたとおりに見てみたんだけど……………」

「どうだったー？ 三井の様子からしてー、若干効果はあったみたいだけど」

「いい効果が悪い効果が、それが問題だ」

「……………つんでれ、っていいものだね……………」

「好感を持ててもらえてなによりだよー」

「うんうん」

「……………でもな、実際はそれを自然にできるのが一番なんだよ」

「そんな人いるのー」

「数少ないが、いるのは事実だな」

「……………へくしっ」

「どうしたのですルリ、風邪ですか？」

「おかしいな、別にそんな兆候はなかったけど」

「なら噂でもされてたのでしょうか」

「……………先輩が私を恋しくなって、噂したとか!？」

「その確率は低いと思いますが」

「うるさい！ きつとそうなの！」

「ではそういってとっておきましょっか」



## 第三十二話

「>いつもとは一味違う私で勝負！ 旦那をベタベタな展開でとりにしちやえ大作戦<第二段！」

「作戦名長いよ！ しかもそんなに大声で言わないで恥ずかしいから！」

「じゃあー、略して プゲラ作戦ー」

「どうしてその三文字を選んだの!？」

「……………」

「はっ!？ ぶ も げ も ら もさっきの作戦名に入っていない!？ ちつとも略になってないよ!」

「細かいところを気にしたら負けだよ、石川さん」

「そつだよー、大らかにいこうよー」

「……………気にしたら負けなの?」

「そつそう。だから今回の作戦の説明に移るよー」

「……………わかった」

「聞きわけがよくて助かるな。では作戦だけど……………石川さんは旦那を体育倉庫の中に連れ込んでくれ」

「……………? で、そうしたらどうするの?」

「そつだな、それから先は……………石川さんは知らなくていい」

「どうして!？ そこ重要じゃない!？」

「石川さんが作戦の中身を知ってしまうと、旦那が気付いてしまうかもしれない……………ということにしておこう」

「付け足された言葉のおかげで台無しだよ!？ 何か企んでるでしょ!？」

「まあまあー、悪いようにはしないからー」

「そつだよ辰美ちゃん、二人の言うとおりにしておきなつて」

「悪いようにしないって言ってるじゃん?」

「ニヤニヤ笑いながら説得しても逆効果だよ！ 楽しんでる!？」

この状況を楽しんでるでしょ!？」

「そんなことないよ……くぷぷ」

「耐えきれてない! 誤魔化しきれないからそんなじゃ!」

「まあまあ、俺たちの言うとおりにしておけば、悪いようにはしないから」

「……どうしてこの人たちを当てにしまったんだろう……」

「そこはまあ、運命ー?」

「神様は騒動が好きなんだね……」

「なおくん、ちょっといいかな?」

「どうした? なんか用事か?」

「用事と言えば用事なんだけど……」

歯切れが悪いな。何かあったのだろうか。

「……体育倉庫について来てくれない?」

「ん、別に構わんが」

おそらく、小倉さんあたりに手伝いでも頼まれたのだろう。それなら一人でやらせるのも可哀想だろう。それに、今手伝っておけば、今度俺がやらされた時、手伝ってくれるかもしれない。

「じゃ、行くか」

「……なんかごめんね、なおくん」

「気にするな」

……タツミよりも、「しっかり!」とか「頑張れ!」などと声をかける女子連中のほうがよっぽど気になるし。

### 第三十二話（後書き）

「みてみん」というサイトに、ええじゃないかの紹介四コマ載せました。時間が有り余っており、絵が下手でも笑わない人だけ見てみてください。

### 第三十三話 圈外（前書き）

あけましておめでとございます。今年もええじゃないかをどうぞ  
よろしく願います。

### 第三十三話 圏外

体育倉庫に着いたものの、実際何をすればいいのか聞いていなかった俺。ある意味間抜けだ。

「さてタツミ、俺はいつたい何をすればいい？ 掃除か？ それとも何か用具でも出せばいいのか？」

どうせ小倉さんから頼まれたのだろうから、仕事はこころ辺のはずだ。以前にも何度が強制労働させられたし。

「えつとね……その……」

言いよどむ様な事か？ ……まさか一人でそこにある跳び箱（十段）を運べとでもいうのだろうか。一遍にやれと言われても無理だぞ。俺はひ弱なんだから、力仕事ならラグビー部の連中にでも頼んだ方が得策だ。

「あの……ね？」

「なんだ！？」

タツミが何か話そうとすると同時に、周りが見えなくなった。いや、これは……。

「扉が閉まったのか……？ 中を確認もしないで閉めるとは常識のない奴だな……。おい！ 開ける！」

ドンドン、と扉を叩いてみるも応答はない。閉めるだけ閉めてどこかに消えたようだ。何ともはた迷惑な話……。

「ついてないな、メールで誰かを呼ぶか……って圏外か！」

さすがに倉庫の中でアンテナが立つほど、ドコのサービスは充実していなかったらしい。

「タツミはどうだ？ 携帯、アンテナ立ってないか？」

「……もしかして……というか、これだよね……杉田君たちが言っていたの……」

「おい？」

「でもこれはやりすぎじゃないのかな……？ でもチャンスと言え

ばチャンスだし……」

「もしもし」

「真っ暗闇の中二人きり……」

「聞いてるか？」

「なおくと……」

「ちよつと話を聞け！」

「うわあ！？ い、いやらしいことなんて考えてないよ！？」

「そんなこと聞いてねえよ！ 携帯、アンテナ立ってないか！？」

「あ、アンテナね、ちよつと待って……立ってない……けどメールが来てた」

「倉庫に入る前だな、そのメールは」

しかし、ある意味いいタイミングかもしれない。返事がないことを疑問に思っ、誰かが探しに来てくれるかもしれないからな。

「っ……！」

「どうした？」

メールを見た途端、携帯を叩きつけるように閉じたその仕草は、まるで見てはいけないものを見てしまったかのようだった。今暗くなければ、表情も読み取れたのだろうが、残念ながらそれもできない。

「なんでもない！」

なぜ威嚇行動に出る。一体俺が何をした。

三井には知る由もないが、タツミに届いたメールにはこう書かれていた。

「旦那もヘタレとはいえ男であり獣<sup>けだもの</sup>！ これを機に一段階先に進め！ by 辰美を応援する女子の会&旦那で楽しもう会」

### 第三十四話 密室

「静かだな」

「……そうだね」

「暗いし」

「……………」

「何か起こりそうだな………ってどうした？」

「な、何が？」

「何がって………何故に俺から距離をとる？」

「明らかに離れているのに、何がもなかるう。」

「いや、だって………二人きりだし………」

「二人きりだな」

「誰もいないし………」

「二人きりだからな」

「同じことを繰り返されても。」

「だ、だから………」

「だからなんだ。問題があるなら、はっきりと言ってくれ。頼むから」

「察するのは得意な方だと自負しているが、情報が少なすぎるので答えは出せない。」

「その！ なおくんがムラムラししたら、私には逃げ場所がないわけだね！？」

「……ムラムラ、ておい。」

「あのその、なおくんを信用していないわけじゃないんだけどね！？ なおくんが男の子であるのも否定しがたい事実であってそういうのはもうちょっと段階を踏んでからというか正式にお付き合いしだしてからというかまさかこんな事態になるとは思ってもみなかったというか！」

「落ちてタツミ。妄想が駄々漏れになってるぞ」

暴走したタツミの言葉を意識すると、意外と信用が低いことが判明した。ちよつとへこむな……。仕方のないことだといえ。

「ああもうどうしよう！ 杉田君も石井君もみんなおもちゃにしてるとしか思えないよ……！」

「待て。やはり奴らが絡んでいたか」

「あ……」

タツミが嘘をつけない性格で助かった。義人が絡んでいるなら話は早い。

「……出てこい馬鹿野郎。十秒以内に出てこなかった場合、俺は貴様に報復処置をとる。十」

「すいませんでした」

「早っ！？ そしてなんでそんなところに！？」

当然見てたんだろうとは思ったが、跳び箱の中に隠れていたとは予想外だ。

「……さて、言い訳を聞こうか」

「興味本位でやった。反省はしていない」

「随分ふてぶてしいなあおい！」

悪いことをした自覚などないのだろう。……大多数が楽しむためなら少人数を犠牲にする男。それが義人だ。

「でも杉田君！ 実際何かあったらどうするつもりだったの！？」

「それは大丈夫だ」

「どうして言いきれの！？」

「旦那のへたれっぷりは全世界が認めるほどだ。やれる甲斐性があるわけがない」

「……貴様そこになおれ、教育し直してやる」

誰が甲斐性なしだ馬鹿。



その後、計画を洗いざらい話させた上で、石井とともに一時間近い説教をくらわせてやったのだった。  
……効果などないのだろうけど。

### 第三十五話 龍

「旦那、ドラゴンっているよな」

「お前の脳内にはな。実在はしないだろ」

藪から棒に。何を言ってくるんだこいつは。

「言い方を変えよう、龍っているよな」

「訳しただけじゃねーか。で、なぜにそんなことを聞く？」

本当に言い方を変えたただけなのに呆れつつ、尋ね返してみる。

「旦那は親に、質問を質問で返すよう教わったのか？」

「……とりあえず殴っていいか」

ストレス解消には、義人をどうにかするのが一番手っ取り早い気がする。

「冗談だ冗談、旦那は頭が固いなあ。そんなんじゃ彼女できないぞ

……っですでに二人候補がいるな、はっはっは」

「……そういうことを言うんじゃない。俺だって悩んでるんだからな」

「世の中のもてない人類に暗殺されるぞ。クラスで言うなら清水み  
たいな」

「あの暑苦しいのが集団で攻めてこられたら、生きて帰れる保証は  
ないな……。大体、義人はどうなんだ。お前だって彼女はいないだ  
ろ」

「何言ってるんだ。俺には彼女いるぞ？」

何！？

「そうだったのか！？ そんな気配感じなかったぞ！？」

衝撃の事実発覚である。義人のことなら大抵知っているつもりだ  
ったので、かなりショックだ。

「水くさいな、そんなことなら今度紹介してくれよ。いやー、あの  
義人が……」

「わかった。なら今日にでもうちに来てくれ」

「……？ どうして義人の家じゃないといかんのだ？」

「いやー、俺の彼女は恥ずかしがり屋で、画面の中から出てこないんだよ」

「ところで、龍は各地で伝承が残ってるらしいな。案外、昔は恐竜以外にもそういうのがいたのかもしれない」

「強引に話を戻した！？　そして俺の彼女はスルー！？」

やはり義人だった。このアホさは間違いなく俺の知っているものである。だから一々突っ込むのも面倒なので、華麗にスルー！。

「まあいいや。龍って……あれって、爬虫類なのか？」

「……飛んでるし、鳥なんじゃないか？」

「確かに。恐竜は鳥に進化したって説もあるくらいだしな」

「へー、そうなのか」

相変わらず博識だ。それなら俺に聞くなよ、とも思うが。

「だが、いろんなドラゴンの絵は間違いなく鱗があるじゃん。あれはワニに近いものがある」

「言われてみればそうだな。うーむ、そう考えると爬虫類に思えてきた……」

鳥とか爬虫類の間が龍なのか？　で、進化の途中を見たのが絵を描いたとか……？　よくわからんなあ。

「……しかし、一体どうしてそんなことを聞いてくるんだ？　どうでもよさそうなものだが」

「何を言ってる！　重要な問題だ！」

「うお！？　ど、どうしてだ？」

妙な気迫を持って、迫ってくる義人。正直怖い。

「ドラゴンの擬人化娘が爬虫類か鳥かじゃ大違いだろ！　全くこれだから旦那は……おい、旦那、どうして蔑んだ目で俺を見る？」

……義人ほど才能と能力の無駄遣いをする奴はそういないんだろ  
うな……。

### 第三十六話 歌

「当然だが旦那の歌を作ってみた」

「作らんでいいし、嫌な予感しかせんから歌わなくてもいい。つか歌うな」

「聞いてください、《旦那の歌》。……ミュージックスタートウ！スタートウってなんだ。ノリノリか。ノリノリだとそうなるのか。止めても聞かないのは想定内だが、突然バックミュージックが聞こえてきたのには驚いた。振り返るとそこには石井。余計な事を……。」

「〜」

……しかも曲はサザさんのテーマかよ……。せめてもつと格好いい曲にしてくれ。

「先日旦那の休みに、付くけてた〜ら〜」

「待て！いきなり問題発言が飛び出したぞ！？」

なぜナチュラルに後をつけることを歌詞にしてるんだ！？音源止める、石井！そう思いつつ石井を見ると、ノリノリで踊っている。駄目だこいつ、早く何とかしないと。

「特売 にんじん 見つけーて ご満悦」

ほっとけ！別にいいだろそんなこと！

「キャベツもたまねぎもー じゃがいもぶたにくもー」

「今日ーは肉じゃがー つぶやく旦那萌えー」

やかましい！その食材が安くて出来る料理なんて肉じゃががカレーくらいなもんだ！サンドウィッチマン（一昨年のM-1覇者）も言ってただろ！

「三井萌えー」

「うるさいぞ石井！いいだろ別に！しかもその日の夕飯、実際に肉じゃがだったんだから余計に！」

く……、とんだ屈辱だ。一体何でこんな恥ずかしい思いをしないといかんのだ。

「大体義人も、どうして俺をつけようなんて考えた!？」

そもそもそれが問題だ。そんなことをする意味がわからない。

「いやー、偶然だよ偶然。おっと」

「……何か落としたぞ。……ってなんだこの写真!？ まさに俺がにんじん持つてる写真じゃねえか!？」

「なるほどー、確かにご満悦だねー」

「写真撮るのは構わんが、なぜに隠れて、しかもそんなところを撮るんだ？ やっぱ脅迫のためか？」

「イッシーじゃあるまいし、そんなことには使わんよ。悪用はしないから安心してくれ」

「その言い方は引かかるなー。まるで僕が脅迫に写真を使ってるみたいじゃない」

その通りだろうが。否定する材料が見当たらん。

「あくまでー、あれは交渉の一環だよー」

……、石井はともかく、いくら考えてもわからん。一体義人がどうしてそんな写真を？

数日後。

「杉田先輩、頼んでたものが撮れたって本当ですか？」

「うむ。これを見るがいい」

「……………。本当に先輩が笑ってる写真だ……………」

「旦那は写真に笑って写らないからな。隠し撮りでもせんと手に入らん。もっとも笑うこと自体少ない気もするが」

「……………」

「どうした保護者ちゃん。報酬なら別にいいぞ？ 今まで通り俺たちを楽しませてくれれば」

「……………それも引っかけりますが、複雑です……………」  
「なんで？」

「……私の魅力って、人参に負けてるんでしょうか……」

「それは違うな」

「どういことです？」

「特売の人参に負けたんだ」

「……まさか特売の人参に負ける日がこようとは、思いもしませんでした」

「まず競うことがありえんわな」

### 第三十六話 歌（後書き）

ルー balan さんの小説で、この小説を取り扱ってくれるそうです。  
ありがたいことなので宣伝。

「タスキ」雑草達の走り」、ぜひご一読を。

### 第三十七話 予定

「先輩、今度の土曜日お暇ですか？ 暇ですよ。部活がないのは杉田先輩から聞いてますし、それ以外重要な用事が先輩にあるとは思えません」

「どれだけ失礼な発言が分かっていつてるのか貴様は」

義人め、俺の情報を保護者相手に筒抜けにするとは。個人情報保護の概念が存在しないのか。それに保護者。俺は繊細な性格なんだぞ？ その発言がショックで登校拒否になり、二ートにでもなったかどうか責任取ってくれる。

「その時は……その……私が養います！」

「ヒモ生活！？」

この年から将来ヒモになる生活を考えてどうするんだ、おい。

「……まあ、それは冗談としてもだ。俺の土曜の予定が部活がなければフリーだと、本当にそう考えているのか？」

「はい」

即答か。即答なのか。……先輩としての威厳が存在しないのか。そういう相手には、少しばかり仕置が必要だな。

「残念ながらその日はデートの約束が……何重くて硬そうなバールのようなものを手に振りかざしてるんだ！？」

「先輩を殺して、私も先輩の墓を建てます……！」

「それただの殺害予告だ！ も、じゃない！ それに冗談だから！別にデートの約束もなければ土曜に予定も入ってない！」

「……本当に？」

「本当だからそのバールのようなものを下ろせ！ 下ろしてくださいお願いします！」

土下座しかねない勢いで頼むと、渋々ながら保護者は凶器を下ろした。……危なかった。思い出が、今まで培ってきたトラウマが走馬灯として目の前を通り過ぎたぞ。涙出てるんじゃないのか、これ？



「先輩、何泣いてるんですか、これくらいのことです。怖かったんですか？」

「……いや、むしろ今までのトラウマを思い出したことで涙が出た」  
自分で言ってる情けない。これから死にそうになるたび、あの情景を見ることになるのか、恐ろしい。

「……そもそも、何度も死にそうになることがありえないか。」

「で、土曜暇だとしたら何なんだ？」

「私たちの文化祭が土曜日なんです」

「それはよかったな、頑張れ」

「……本気で言ってますか？」

「……いかないと駄目？」

「女性の誘いには応じるのが男性でしょう」

「面倒くさい」

「楽しいですよ」

「それはよかった。友達と楽しむといい」

「でも、先輩と一緒にだとより楽しいと思うんです」

「俺は読書を一人でしても楽しめるぞ？」

「………」

「………」

「杉田先輩に頼んどきます」

「……結局行くことになるのか……」

断つても無駄なんだろうな。断ったら断つたで、一時期の騒音おばさんのように騒ぎ立てられることが目に見えてるし。

「仕方ない。行くことにしよう。保護者、お前のクラスは？」

「3 - 6です」

「シフトは何時頃だ？」

「午前中です……来てくれるんですね!？」

「いや、その時間を避けていく」

「………」

「………」

「き・て・く・だ・さ・い・ね？」

「……はい」

やけにプレッシャーのかけ方がうまくなったなあ、保護者。あ、また涙が……。

### 第三十七話 予定（後書き）

テスト四時間前なのに小説を書いている自分に、我ながらびっくり。  
現実逃避っていいですね！

### 第三十八話 抵抗（前書き）

久々の500アクセス突破です。ご愛読ありがとうございます。

### 第三十八話 抵抗

「土曜日は、文化祭だそうですね」

「それがどうかしましたか、父さん」

「あなたの中学では一般客も来てよいはずですよ」

「仰るとおりですが、何か？」

「なぜ父を誘わないのです」

「思春期の女子は親を他人に見られるのが嫌なものなのです」

「それと情報を与えないのは別問題だと思いますが」

「教えなければ双方嫌な思いをしなくていいでしょう？」

「それは気付かなければこそ、言えることです。現に、無視をされた父の心は深く傷ついています」

「無表情で言われても、説得力はありませんよ」

「それは表面上に限ったことです。内心では海よりも深い傷を負いました」

「せいぜい瀬戸内海程度の深さでしょう」

「いえ、マリアナ海溝以上の溝を抱えているのですよ」

「それは可哀想ですね。家でゆっくりと傷を癒してください。家で」

「二度言いましたね？ 文化祭には来るな、との念押しですか」

「その通りです」

「……ということが昨日あったのですよ」

例によつて授業が一段落したところ、健三さんの無駄話（娘の悲哀編）を聞かされていた。思春期なら仕方がないのではないだろうか。

俺も姉が文化祭に来て迷惑したので、健三さんの娘さんに賛成だ。

……でも保護者は俺を呼んだんだよな。身内でないからいいのか。

「それに続けて、娘は「父さんのような変人に来られると、私だけ

でなく周囲の人々にも迷惑です」とまで言っんです。ひどいですよねえ」

人ごとみたいに言わんで下さい。俺たちはその周囲の人々に含まれているんですから。

「私のどこが変人だというのでしょうか。娘は家での私しか知らないからそう言うのでしょうかねえ」

……健三さん。少なくとも、学校でのあなたは変人以外の何物でもない。そして家でそう思われているのならツアーアウトだ。サッカ―ならカード二枚で退場です。

「まあ、どれだけ抵抗したところで、私が行くのは何人たりとも止められないのですけどね」

大人げねえ！ 娘が嫌がってるなら止めてあげてくださいよ！

「本来、文化祭とは日頃の学習成果を発表する場だと思うのです。地域の文化や歴史……そういったものを親に見せることで、学校での学習は充実したものである。そう披露するものが根底になければなりません。したがって、私が娘の文化祭に行くのには正当な理由があると言えるでしょう」

健三さんが正論を言ってる！

「まあ、実際そんなことやられてもしたら行きませんけどね。今回の目的は暇つぶしが第一ですから。あくまでそれは、私が行くための建前です。方便とも言います」

でもやっぱり健三さんだ！ ここまで自分中心だといっそ清々しい！

「第二の目的は娘が嫌がるからなんですけどね」

屈折した愛情！？

「人の嫌がることを進んでみましょう……いい言葉です」  
悪用しないでください！

### 第三十九話 署名

「月日は流れ……保護者の中学での文化祭当日」

「何故にパワプロ風なのかね、旦那？」

「なんとなくだよなとなく。そこは突っ込まんていい。」

「しかし、久しぶりに来たが……やっぱなんもないよなー、ここ」

「そうだな。見渡す限りの田園の中、存在する中学……。田舎丸出しだな」

別にいいだろ、田舎でも。たとえば、NHKに郊外の〰村と紹介されようと俺はくじけんよ。

「その時歴史が動い……。終わってしまったのは勿体無いよな……」  
「そんな私的なことはどうでもいいから。旦那、久々の母校に何か一言」

「風強い」

「母校についての感想じゃない!？」

「何もないから直接風が当たるのだよ。体育でテニスをしようものなら魔球連発、テニスの王子様状態だからな。懐かしい。」

「おお、文化祭らしく入口から人だかりが……。人混み行きたくない……。ここまで来たんだし、保護者には来たってことにして、帰らんか？」

「旦那、消極的にもほどがあるだろ。アクティブになろうぜ」

「もともと無理やりに誘われて、だしなあ。やる気もないし、昔の知り合いに会うのも嫌だし。元担任とか会いたくないぞ? 元顧問とかはなあおさら。」

「……!?!? おい旦那、あの人だから……。何か署名活動しとるみたいだぞ?」

「だったらなんだって言うんだよ……。まあ、いいんじゃないか? それだけ、やりたいこととか成し遂げたいことがあるんだろうよ」  
署名といえどポケビ、ブラビを思い出す……。ウリナリとか、炎

のチャレンジャーとか、上々とか、内Pとかウンナンの番組は神が  
かったのになあ……。終わってしまったのが悔やまれる。なぜ終  
わったのか、詳しく知りたければググるといいと思う。

「まあ、俺は大きいものが怖いのでこれ以上は言えないが……」

「旦那、今日は微妙なテンションだな……。署名活動見てこうぜ、  
内容知りたいし」

「構わんよ」

連れられて見に行った先、そこで繰り広げられる勧誘の数々。

「署名活動に参加をお願いしまーす」

「二次元の女性との結婚を認めようー！」

「偏見をなくせー！」

「俺たちはお遊びでやってるんじゃない、本気なんだー！」

…… 終わりすぎだろ日本の中学。義務教育。ってか俺の母校。

「なんなんだこれは……」

「なんだかんだと聞かれたら？」

「義人、ややこしくなるからお前はしゃべらんでいい」

ただでさえ混乱しとるのに、お前がでしゃばると余計に

ー

「あつ、師匠！」

義人が元凶かよ！？



### 第三十九話 署名（後書き）

テストが終わりました。……さて、何個単位落としたかな……。。

## 第四十話 影の軍団

来て早々になけなしのやる気も失われつつある今。俺は一体どうすればいいんだろうか。

「文化祭を楽しめばいいじゃん」

「……一応聞いておくが、さっきの奴らはお前の弟子か？ 弟子なのか義人」

無駄にカリスマ性を発揮したところを見ると、おそらくそうなのだろうな」と考えつつ、尋ねてみる。

「旦那、それは違うぞ」

む？ 返答が意外だ。誇らしげに応じるのかと思ったが。

「それはすまんかったな。さすがにあそこまでの」

「あいつらは同じ二次元を愛する同士であり仲間。そこに上下関係は存在しないのであり、共に精進するものであるのだから！」

「……………」

頭痛くなってきた。

義人によれば、あの団体は「二次元の嫁を愛し、生涯を捧げることを誓う漢達の集い」という名称を持つそうだ。因みに、義人が団長を務めていた三年間（一年時から三年連続で就任したのは義人が唯一らしい）の間、この集団は陰で勢力を広げていたらしい。とは言え、表舞台に立つこともなかったため知られることはなかった……そうだ。その功績をたたえられ、現在は隠居の身ながら名誉会長となつて相談に乗っているとのこと。果てしなくどうでもいいが、こいつの無駄な才能はどうにかならんのか。正直こいつが指揮をとったら企業設立、軌道に乗せるというくらいやってのけそうだ。「オタクというのは一般人に疎まれる存在だからな。俺の団長時代はあくまで影の組織として徹底していたのだが……これも時代の変

化かな」

「いいのか？」

「何が？」

「いや……その裏舞台の集団がこんなところで署名活動を行ってだよ」

「なに、もう若い者の時代だから……。俺の出る幕じゃない」  
達観した表情で語る義人。遠くを見据えるその眼には、何が写っているのだろうか

「……チェリーが俺の嫁だというのは、譲れんがな……！」  
写っていたのは二次元の映像だったようだ。馬鹿野郎。そして人選が古い。セイバーマリオネット」をわかる読者がいると思うなよ。年代を考えろ。

「どうした旦那」

「なんでもない、気にするな。……ところで、お前はあの署名に参加せんでいいのか？」

「必要ない」

「そうか、お前もなんだかんで馬鹿馬鹿しいと思っているんだな」  
高校生と中学生、年齢に差があるからそれも当然か。

「嫁だと思うのは心の中で十分。自分の全てを他人に分かってもらう必要などないのだから」

「……………」

いや、格好よく言っても、所詮二次元嫁論争だから。

#### 第四十話 影の軍団（後書き）

ルー balan さんからもらったネタを使わせていただきました。ルー balan さん、ありがとうございます。

## 第四十一話 出し物

当然のことながら、校内は入口以上のにぎわいを見せていた。もちろんうちの高校の文化祭に比べれば、規模も混雑も可愛いものではあるのだが、それでも校舎が小さい分、閉塞感を感じていた。

「……帰りたい」

「こらこら旦那、まだどこも回ってないだろうが。わざわざ来たんだから少しくらい時間かけても罰は当たらんだろうよ」

「だけどなあ……徒歩十分圏内だし。北高より近いし」

「口答えするな！」

「ええ！？ キレられたポイントがわからねえ！？」

「さあ回る出し物を決めようか」

「……義人、お勧めは？」

「俺のお勧めはこのクラスの出し物、占いの館>ファイト十五発くだ」

「そこ本当に占いの館！？ 意味がわからないよ！ それにファイト十五発！？ 頑張りすぎだろ！？」

「そして、このクラスの出し物、ヒーローショー風小芝居 囚われの姫を救え！ だ」

「……中学の文化祭だもんな。面白そうか、それ？」

「そうそう、旦那が行ったら間違いなく楽しめる内容だよ」

「そうなのか？」

「主に俺が」

「楽しむのお前かよ！？ 俺の反応を見て笑うつもりなんだな！？」

「主演は古木瑠璃さんです」

「……？ はっ、保護者か！」

「旦那、今素で保護者ちゃんの名前忘れてただろ」

「ソ、ソナコトナイデスヨ？」

「保護者ちゃん泣くぞ？」

「まあ、そんなショーに連れてかれて、反応を逆に楽しめる感満載な俺も可哀想だし、泣きたくなるけどな」

「黙っててやるかわりに、一緒に回ろうな、な？」

「がつつきすぎだよお前……別に本名忘れてたくらいいばれてもいいし」

「じゃあ、言い方変える。一緒に行かないとこの学校中に旦那が保護者ちゃんと付き合ってるって噂流す」

「脅迫に進化した！」

「くくく……来年北高にきた後輩に質問攻めにあうがいいわ！」

「悪役口調だな、お前こそ小芝居に出るべきだ」

「でも行くんだろ？」

「行くけどな」

来て何もせず帰るのも、確かにもつたいない。俺の反応を楽しむ、というくらいだ。きつと驚かされる要素があるのだろう。それなら行っても時間の無駄にはならんだろ。

「じゃあ、義人行くぞ！」

「おう、俺たちの戦いはまだ始まったばかりだ！」

そう、文化祭の出し物を観つくすまで、俺達の物語は続くんだ！

永久に……！

「……！？なんだこの打ち切り未完、みたいな空気は！？」

「たかだか見て回る出し物を決めるくらいで大げさだよな」

## 第四十一話 出し物（後書き）

気付いたら、ええじゃないかシリーズ書き始めて一年たってました。ユニークアクセス累計も十三万を越え、PVアクセスでは七十万越えです。こんな中身のないグダグダ小説ですが、読んで下さる方々には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

## 第四十二話 館

義人の勧めに従って、占いの館とやらを体験してみることにした。「どっちから入る？ 義人から行つとくか？」

「んー、そうだな。その方が都合がいいな」

「何の都合だよ」

その問いには答えず、義人は薄暗い闇の中に消えていった。うむ、占いの館というだけのことはある。ムード作りはほぼ完ぺきだな。暗幕が不思議な気分になさせてくれる。

「次の方どうぞー」

「む、はいはい」

考えているうちに順番が回ってきた。まあ、義人の次だったんだから、すぐ順番が来るのは当然なのだが。

「……我らの館へようこそ。……あなたは何を占って欲しいのですか……？」

くぐもった声、黒いベールで顔を隠した様子は雰囲気抜群。中学の出し物だと忘れてしまうような手の込みようだ。

……そして、あるいは保護者が占い師にでも扮して、何かしてくれるかとも覚悟していたが、そんな様子はなさそうだ。疑心暗鬼にとられ過ぎなのだろうか。疑いすぎることはよくないし、少しは反省しておこう。

「そうだな、じゃあ二年後の受験に関して」

「とりたいところですが、私が占って欲しいことを言い当てましょう……恋愛事について悩んでますね……？」

「いやだから受験について」

「なるほど、高校に入って初めて体験することが多くあったようですね」

「受験」

「それでは私がその解決法について占って差し上げましょう」



駄目だこいつ。人の話を聞いちゃいない。

「……まあ、それでいいです」

俺が十六年程度の人生で学んだことの一つは、ムキにならないこと、大人の対応を心掛けることだ。諦めてるだけだろ、とか突っ込んではいけない。

「……ふむ、あなたは複数の女性から告白されて悩んでいるようですね」

「！？」

置いてあった水晶をのぞき込んだ数秒後、占い師はこう言い当てた。……こいつ……できる……！？

「なぜそれを……」

「……そうですね……。……そう、星は何でも知っているのですよ」  
間があつたような気がしたのは気のせいか？ ……決め台詞か、決め台詞を考えていたのか？

「……一人は幼なじみ、一人は後輩と見ましたが」

占い師こええ！ 個人情報丸わかりなのか！？

「……どうすればいいんでしょうか」

自然と敬語になつてしまう俺。この子も後輩なのだろうが。

「そうですね……なすがまま、自分の心のままに動くのがいいですよ」

でもアドバイスは適当だ！

「……ふむ、失礼、少し席をはずします」

何を思ったか、急に占い師が立ちあがった。

「……例の二人のことを妄想しつつお待ちください」  
しねえよ！

数分経つても占い師は戻ってこない。一体客を待たせて何をして  
いるのか……」

「……！」

「ん？」

占い師が出ていった扉から、声が聞こえた。……あれは……怒鳴

り声？

「なんだよ……文化祭で穏やかじゃないな……。行っただしなめてくるか」

## 第四十三話 理解

「おい、文化祭だつてのにもめ事は止め……」

注意をしようと現場に向かうと、遭遇したのは予想外の状況だった。

まず、真黒な服で身を包んだ女の子。これは先ほどの占い師だろう。いてもおかしくない。

次に、理由は知らないが若干怒り気味の保護者。まあ、こいつはこの生徒だ。いてもおかしくはない。

最後に、我が親友である義人。きつと、もう占いが終わって暇になったのだろう。そう考えれば、ここにいることに疑問をさしはさむ余地はない。

問題は、保護者が占い師を押し倒すように覆いかぶさっており、義人がそれを止めるでもなくニヤニヤと笑っていることだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

誰も声を発しない。かといって俺も何か言えるほど、状況を整理しきれていない。

「…………先輩」

沈黙を破ったのは保護者だった。少しばかり乱れた制服を直しつつ、俺に話しかけようとする。

「…………いや、何も言わなくていい」

情報を整理した結果、導き出される答えは一つ。保護者に言わせるべきことではない。

「あの…………これは…………」

「空気読んでなかったよな…………。うん、保護者がそういう趣味を持っていたとしても、俺はできるだけ態度を変えないよう善処する」

「……ひょつとしなくても誤解してますよね？」

「あのだな、同性愛は日本では市民権を得ていると言いはれ難いが…

…頑張ってくれ」

「やっぱり誤解してる！？」

「もういいんだ、何も言うな……」

「違います！　そういうんじゃないんです！　私は先輩一筋ですから！」

「……？　だがしかし、義人がいるのに止めてないってのは……」

「うむ旦那。この子らは喧嘩していたわけではないぞ？」

「杉田先輩も煽らないでください！」

「……じゃあ、その占い師の子は……」

「……ルリ、優しくしてね……？」

「義人、ここは見てやらないのがマナーだろう。別の場所行くぞ」

「了解、旦那」

「だから違うんですってば！」

数分後、興奮してしまった保護者をなだめることに成功した。冷静になったところで質問を開始する。

「……で、同性愛出ないなら、なぜ押し倒したりしたんだ？」

「それは……」

「私が段取り通りに仕事をしなかったからですよ」

「……そのベール取ってくれる？」

「はい」

「……ああ、健三さんの娘さんだったのか」

「はい、いつも父が迷惑をかけております」

「……」

フォローできねえ。

## 第四十四話 真相

乱れた服を直し終え、ようやく落ち着きを取り戻した保護者に、こうなった原因を尋ねてみる。百合疑惑が完全に晴れたわけではないのは、ここだけの秘密だ。

「で、どうして二人絡まってたんだ？」

「絡まってたとか言わないでください」

だって事実じゃん。百合疑惑再浮上。

「そもそも、大声が聞こえたから、俺は出てきたんだが」

来ない方がよかったみたいだ。あいつらにとっても、俺にとっても。

「……それはですね……」

なぜか言いよどむ保護者。心にやましいことでもあるのだろうか……？

しかしそれに代わって、もう一人の当事者が説明してくれた。

「ルリが怒ってた原因は、段取りが違うってことだったんです」

「段取り？」

「ちよつと岬……むぐ」

話を止めようとした保護者を、義人が黙らせる。……手際がいいな。

「説明を続けてくれ」

「はい。このクラスの出し物を手伝う代わりに、三井先輩が来たら占い師役を変わってもらう予定だったんです」

「保護者に？」

「いえ、このクラスの人から私にです」

別に段取り狂ってないじゃん。

「ルリの言う段取りは、私の占いの内容関係ですよ」

「……あれか」

思い出されるピンポイントな占いの数々。そりゃこいつらが絡ん

でるなら、分かって当然だわな。

「三井先輩、どうすればいいか私に聞きましたよね？」

「ああ」

確かに。あの流れで誘導されたら尋ねずにはおれないっていうか。  
「そうになったら、私は……後輩の子と付き合つとよいでしょう……」  
「……と言つ手はずだつたんですよ」

「むー！ むー！」

真つ赤になつて話を止めようとする保護者。心証を操作しようとしとつたのかこいつは。

「それを私が違つた答えを言つたので怒つたんですよ」

怒つてたようには見えなかったが。じゃれてたようにしか。

「なんで別の答えを？」

「なぜつて……それはですね」

それは？

「怒つたルリが見られるかと思つたからですな」

この子Sだ！ 健三さんの娘だから、いろいろ変な点はあると思つてたけど！ 無表情で淡々と述べるところとか健三さんにそっくりだ！

「今悪寒がしたのですが、失礼なことを考えませんでしたか？」

「……そんなことはないと思う」

親に似ていると思うのは、失礼に当たらない……よな？ 親が健三さんでも。

「……ところで、義人は計画に加担してたんだらう？ なぜ保護者を黙らせてるんだ？」

「なぜつて……それはだな」

それは？

「その方が面白くなりそうだからだ！」

こいつトラブルメーカーだ！知つてたけど！

## 第四十五話 健三さん in 占いの館

「何度かここには来ていますが……相も変わらず边境の地ですね、この中学は」

娘の文化祭ということで、わざわざこの地までやってきてしまいました。風は強い上に、車での来校は禁止と、来る要素はほとんどないのですが来てしまいました。これで興ざめするような出し物ばかり見せられた日には、教育委員会に一言いつてやらなければなりません。以前会った教育委員会のお偉方は、祝電で無駄な長話をするくらいしか脳がないようでしたので、効果など期待できるはずもありませんが。

「そこのおじさん、うちのクラスで占っていきませんか？」

歩いていると、小さなお嬢さんに呼び止められました。女子は発育が早いので高校生と大して変わらないはずですが……それでも小さく感じますね。

「占いですか、それは面白そうですね。少しばかり立ち寄らせていただきますしよう」

「いらつしゃいませ！ いやー、さっきごたごたがあって入客数が減ってたんですよー」

「ごたごたを起こす人がいるとは。お祭りとはいえ場をわきまえてほしいものです。」

「……では、何を占って欲しいのですか？」  
「そうですね。」

「では韓国経済がいつ破綻するのかについて……」  
私の予想では、アメリカへの借金返済時期が来る四月ごろなのですが。」

「……あの、もう少し小さなことでお願いできますか……？」

まあ、これを当てられたら経済評論家が涙目になりますしね。きつとわかってて答えないのでしょ。奥ゆかしい。

「それでは金正日がいっし」

「それも駄目です！ 国際関係はやめてください！ できれば政治も！」

ふむ、それでは何を尋ねましょうか。

「明日の天気は」

「天気予報を見てください」

「ドラクエ9は成功するのか」

「批評サイトでも見てください」

「この世に神はいますか」

「いません」

最後は普通に否定されましたね。無神論者なのでしょうか。

「……もう少し占いがいのあることを聞いてくれますか？」

贅沢な占い師ですね。注文の多い占いの館です。

「……それでは、ですね……」

本命を占ってもらうこととしますか。

占いの館を出た後も、私の満足感が途絶えることはありませんでした。

「私の望むように、あなたの娘さんの望む通りにことは進むでしょう、ですか」

まあ、あれだけ努力をしているのです。神がないのなら実力で結果は決まるのですから当然でしょう。そう思いながら歩く健三さんの鞆には、>合格祈願くのお守りが踊っているのだった。



第四十五話 健三さん i n 占いの館（後書き）

健三さんを出してほしいとの要望だったので、出てきてもらいました。いつもながらの人気ぶりに脱帽です。

## 第四十六話 別離

保護者と健三さんの娘さんは、これからまだ準備が残っているらしい。そのため、俺と義人に必ず観に来るように念を押してきた。

「絶対、ぜーったい来てくださいね!？」

「はいはい」

「絶対ですよ!？ 杉田先輩、必ず連れてきてください!」  
気合入ってるな。

「そこまで言われたなら行ってやらんこともないが、出し物は何なんだ？」

それを教えてもらわんことには、どうしようもない。

「それは秘密です」

何故だ。

「それも秘密です」

「……義人、別の場所回るぞ」

「先輩ー、いいじゃないですかー」

すぐるような目つきで俺を誘う保護者。若干涙目である。

「……仕方ない、行ってやろう」

「弱いなー、旦那」

うるさい、ほっとけ。

「……先輩、また後で会いましょうね……」

「はいはい」

「いい加減にしてください、ルリ。何回別れのあいさつをすれば気が済むのですか」

「でも、せつかくの機会なのに……」

「クラス的面々に怒られますよ。ただでさえ、いい意味でも悪い意味でもルリは目立ってるんですから」

やっぱり目立ってるのか。

「……健三さんの娘さんも大変だな」

「それと三井先輩」

「なんだ？」

「岬でいいです。あの親の娘と言われるのは一々気に障ります」

健三さん泣くぞ。

健三さんの娘さん……改め岬ちゃんが、ルリを引きずって行く。

襟の裏をつかんで、文字通り引きずって行くのは慣れているのだろう。あの子も苦労してるんだろうな……。

「あの二人は、俺たちのような名コンビみたいだな」

「いやいや、どう考えても岬ちゃんが一方的に苦労してるだろ」

その点では確かに俺たちに近いかもしれんが。

「で、旦那？ これからどうするよ？ 俺は腹が減ったんだが」

「忘れたか義人。この中学は食い物関係の出し物は禁止だろ」

衛生上の関係でいかならしい。単に教師陣が面倒だからなのでは、と疑ったのは昔の話。

「旦那こそ忘れたか。一つ飯が食える場所があるだろ？」

「そんなのあったっけか……？」

公立中学であり、九色があるため、学食も購買もない。だから食うものなんて……。

「あ」

「……思い出したか。そう、一つだけあり、しかも無料で食える場所……それが家庭科部の本拠地、調理室だ！」

「せこいな」

「旦那に言われたくはない」

この後、義人は調理室で無料配布していたケーキを食い荒らすのだった。全くもって迷惑な客である。

## 第四十六話 別離（後書き）

m i x i にて読んでくださってる方からメッセージもらいました。  
尻をたたかれないと書く気になれない自分は駄目人間ですね、わかります。

## 番外編 ト라우マバレンタイン

ケースー 初バレンタイン（姉編、三井直樹三歳）

「直樹、いいものあげるからこっちにおいで」

「わー、なにになに、お姉ちゃん」

「今日はバレンタインって言うてね、女の子が男の子にチョコをあげる日なんだよ」

「なら、お姉ちゃんは僕にチョコをくれるの？」

「そうだよ。はいこれ」

「わーいありがとう。チョコ チョコだー。食べていい？」

「いいよ。食べなさい」

「いただきます……うん、おいしかった。ありがとう！」

「食べたね？」

「え？」

「チョコを食べたね？」

「う、うん、お姉ちゃんが食べていいって言ったから……」

「時に直樹、三月十四日はホワイトデーと言ってね、男の子がチョコを貰った女の子にお返しをする日なんだ」

「そうなんだ。じゃあ、その日にお返しすればいいんだね」

「その通り」

「あー、でも何がいいのかなあ……」

「それなら私の欲しいものでいい？」

「うん、いいよ！ でもお金のかかるのは無理だけど……」

「ああ、そんなことはないよ」

「じゃあなんでも言うて！」

「>絶対服従券<」

「！？」

「だから、私に絶対服従を誓うという券」

「……効果はいつまでなの？」  
「無論生涯続く」

### ケース二 悲劇（タツミ編、三井直樹四歳）

「え、ちょっと待って、泥は食べられないよ、冗談だよ、バレンタインはチョコを食べる日であって泥を食べる日では……ままことだよ、僕がそれを口に含む必要はない……ちよつと、なんでそんな無理やり……やめて！手を塞がないで！話せばわかるよ！だから早まらないで！少し考えればわかるでしょ、泥団子は食べるものじゃないよ、いや、ちよつといやあああああああ！！！！」

### ケース三 平等に（保護者編、三井直樹十二歳）

「おーい旦那、女子がバレンタインのチョコ配ってるぞ」  
「……！？バレンタイン怖いバレンタイン怖いバレンタイン怖い」  
「旦那、何に怯えてるんだ……？お、保護者ちゃんも来たぞ」  
「せ、先輩！バレンタインですから！義理の！義理のチョコをあげます！感謝してくださいね！」  
「……食べられるのか？」  
「いや、チョコは食べるものだろ。何言ってるんだ」  
「いいから早く受け取ってください！」  
「うわ、でっかいチョコだな……本当に義理なのか怪し痛い！？」  
「杉田先輩は黙っててください」  
「……ありがとう、保護者」  
「……っ！義理ですから！勘違いしないでください！」  
「なーなー、俺にはないの？」

「……杉田先輩にもありますよ、はい」

「……なんで俺は五円 あるよチョコ？」

「義理ですからそんなもんでしょう」

「やっぱり旦那だけ特別だろ」

「義人、せっかくくれた保護者に失礼だろ。あらぬ疑いをかけたりしたら。義理じゃなきゃ本命ってことだろ？ 保護者が俺を好きなんてありえんよ」

「……………」

「……………」

「あれ、なんで二人とも黙る？ 俺悪いこと言ったか？」

「……死ねばいいのに」

「保護者ひでえ！？」

## 第四十八話 参上

「ふははははは、往け戦闘員ども」

「キエー！」

「このまま肥沃な土地である牟呂を、圧倒的な力を見せつけ我らが手中に収めるのだ」

「キエー！」

「愚民ども、地にひれ伏し命乞いをするのだ。さすれば命だけは助けてやるう」

……。中学生にもなって出し物がヒーローショーというのは如何なものなのだろうか。

「キエー！……どうか命だけはお許してください……」

キエーキエー言つてたの一般市民かよ！？

「この哀れなる雄豚に同情心のかけらでもお持ちならば、慈悲と御思いになって、その寛大なる御心、海よりも広く宇宙ほど無限である度量を発揮して、我らに今しばらくの生存を戴きたく存じます……」

……！

大げさすぎるよ！ どれだけ立場弱いんだ一般市民！ プライドを持ってよ頼むから！

保護者に懇願されたので、仕方なく来てみた小劇場……もといヒーローショー。誇大広告というか詐欺じゃないかと、小一時間問い詰めたところだが自重しよう。関わり合いになるとろくなことがない。今までの経験からして。

「旦那、面白いなあ」

「マジでそう思うなら検査を勧める」

「なんの？」



「お前が人類かどうか」

「脳検査ですらないのか!？」

「まあ、一割の冗談はさておき」

「九割本気!？」

「どこが面白いというんだ？」

「いやー、突っ込みどころ多すぎじゃね？」

「……それは確かに」

「というわけで、突っ込みながら観るのを推奨する」

「それはいいかもな……お、ヒーローっぽい出てきた」

「待て！ 非道なる甲斐人よ！」

イントネーションおかしい！ 山梨県人と違うから！

「出たなムローファイヴ」

今度は妙に発音いいな……。

「一般人に手を出すとは何たる外道！ 恥じようと思わんのか！」

「はあ……はあ……怪人様……もっと……もっと私に罰をお与えください……」

一般人がMだ！ 罰になってない！ てか一般人と呼んでいいのか!？

「旦那、特殊性癖の持ち主を否定するのはよくない」

「ごめんなさい」

「よろしい」

……理解はしがたいけど、個人の好みだもんな。深い干渉は止めよう…… な少年の話を書いたラノベもあることだし。

「みんな！ いくぞ！」

「」「おう!」「」

おー、ムローファイブの面々が集合してきた。

「情熱のレッド！」

リーダー格だろうか、いい感じだ。

「豊川用水のブルー！」

前置きがレッドと違う！ 統一しろよ！

「価格崩壊を防ぐため、出荷されず食べられもせず肥料となつてしまつ大量生産キャベツの色グリーン！」

長い！ そして生々しい農家の事情を正義の味方の色説明に使うな！

「先輩への愛に生きる乙女……ピンク！」

……………。

「旦那ー、ツツコミ放棄は職務怠慢だぞー」

「やかましい」

## 第四十八話 参上（後書き）

久しぶりに感想が来たので書きました。気まぐれです。

## 第四十九話 進路（前書き）

またも投稿間隔が空きました。すいません。

## 第四十九話 進路

水泳部室にて、男子だらけの座談会中。

杉田「ポロリもあるかも！」

三井「ねえよ！ あつたとしても誰も喜ばねえし！ もし起きたらそれは事件だ！」

一応水泳部室は誰でも入れるので、女子がいつ入ってきてもおかしくないのである。

松田「俺たちももうすぐ文理を決めないといけないからな」

片山「みんなはもう決めてる？」

浜口「いや、まだ俺は決めかねてる」

田村「……将来何になりたいかを考えて決めるのがベストだろ」

石井「浜ちゃんは将来、何になりたいとかあるのー？」

浜口「あるぞ。できれば体育教師になりたい」

片山「信也は昔からそうだもんね。体育教師って文理どっちが有利とかあるのかな？」

杉田「さあ？ でも理系でいいんじゃない？」

三井「根拠はあるのか？」

石井「小倉さんは理系だって言ってたしねー」

松田「そうだったのか……意外だ」

浜口「あの筋骨隆々とした体で、細かい計算とかしてたんだ……」

田村「……想像がつかない」

皆の脳裏に浮かぶのは、学生服が筋肉ではち切れんばかりになっている小倉さんが机に向って延々と計算している姿。イメージにそぐわないことこの上ない。

片山「……まあ、小倉さんのことはいいや。他にみんなの進路が聞きたいな」

アンケートをとった結果、水泳部内では文系が三人、理系が四人。北高では二年で文理クラスが分かれるため、ここで別コースに分か

れた人は、一緒になることがなくなった。

杉田「……べ、別にさみしくなんかないんだからね！」

三井「気持ちが悪い。気分が悪くなるから地球から出ていけ」

杉田「退去宣告！？」 範囲でかすぎだよ！」

浜口「まあコントはそのくらいにしておいて。イッシーは将来何になりたいとかあるのか？」

石井「僕は飛行機とか作りたいな」

松田「イッシーは見るからに理系だしな……飛行機か、いいんじゃないか？」

石井「ゆくゆくは自分で作った飛行機の側面にー、>らきすたくのかがみんとか描いて飛ばしたいな」

三井「一瞬でもお前を見なおした自分をぶん殴ってやりたい。鈍器で」

所詮石井だった。

松田「そう言うみつちゃんは将来の夢あるのか？」

三井「あるぞ」

浜口「教えてみ、ん？」

三井「聞きたいか？ イメージと違うかもしれんぞ？」

片山「そうなの？ 聞きたい聞きたい」

杉田「……………」

石井「ではー、三井の将来の夢はー？」

三井「それは……公務員だ！」

全員「……………」

三井「……あ、あれ？ 意外すぎたか？」

浜口「イメージ通りすぎるな」

田村「……よく言って堅実」

松田「夢がない」

三井「……何故、将来の夢を語っただけでフルボッコにされなきゃならんのだ……」

## 第四十九話 進路（後書き）

ちよつとした言い訳。大学の新歓用四コマとか、たまってた物の消  
化とかで忙しかつたんです。漫画見たけりゃ立命にまで来てくださ  
い。無料配布してます。

## 第五十話

「保護者、話がある。今から言うところに、一人で来てくれないか」

「……え？先輩それってどういう……」

「頼んだぞ」

「あ……は、はい！」

「とまあ、こんな会話で呼び出されたのにもかかわらずですね」

「ああ」

「どうして！私は吉野家にいて！しかも先輩以外にもう一人いるんですか……！」

そう怒鳴りたてるな、他にもお客さんはいるんだから。いくら入客が少ない時間帯とはいえ、貸し切ってるわけじゃないんだぞ？

「ふーっ、ふーっ」

「猫かお前は……大体においてだ、相談は清水から持ちかけられたからだし」

「それならそうと電話の時に言ってください！ てつきり……」

「てつきり何なんだ？」

「うるさいです先輩！それで用件はなんですか？」

「それは俺から説明しよう」

「くだらない用件でしたらその人に襲われたと大声で叫びつつ北高周辺を練り歩きます」

「うわー、清水の人生、かなりの危機的状況にあるんじゃないか？」

「人ごとか！人選間違えてるぞ三井！この娘危険だ！」

「いやー、だがこんなこと頼める女子他に見当たらんしな」

「……………」

「保護者くらいなんだ、理由も聞かず付き合ってくれるのは……。感謝してる。ありがとうな」

「……………」



「本当に嫌なら俺なんかの相談断ってもいい。もちろんそれで恨んだりもしない……。ただ、できるなら手伝ってほしいというのも事実だ。……駄目かな？」

「……先輩……。いえ、私先輩のためなら別に構わないです……」  
「おい、話続けていいか？」

「……空気読んでください、名古屋清水口的美宝堂さん」  
「また東海地区限定でしかわからないネタを……」

美宝堂とは、「名古屋清水口的美宝堂へどうぞ！」のフレーズでおなじみの、眼鏡をかけた三世帯家族が出てくる老舗のCMである。東海の人間はこのCMに出てくる子供（現在はいいい大人）と共に成長してきたと言っても過言ではない……。まあそれはそれとして、なぜに保護者は急に不機嫌に戻ったんだ？　そこそこ機嫌がよくなつたように思えたのに……？　保護者が読めといった空気が俺も読めていないな。黙っておこう、馬鹿にされるのも嫌だし。

「俺は彼女が欲しいんだ！　そのための指南をお願いしたい！」  
「彼女が欲しいなら性格矯正プログラムでも受けて、品行方正公明正大場の空気を读める性格を少しなりとも獲得してから出直してください」

「……保護者、清水はこれでも繊細だから。あんまり言いすぎると泣きだすぞ。こんな場所でも」

だって早くも涙目だし。吉野家で泣きだされたら俺には如何ともしがたい。今でも結構店員の目が厳しいのに。

## 第五十一話 会話（前書き）

また間隔空きましたね。吉野家のセールが悪いんです。店長が七連勤とか入れるから……。

以上聞き苦しい言い訳でした。本編どうぞ。

## 第五十一話 会話

「店員さん、頭の特盛りとけんちん汁、ポテトサラダの胡麻ドレッシングで頼むよ」

「ねえねえ、頭の特盛りってなあに？」

「頭の特盛りとはご飯は並みの量、牛肉は特盛りの量というメニューのことさ」

「へえ、清水君って物知りなんだね、素敵！」

「お待たせしました、こちら御注文の品になります。ごゆっくりどうぞ」

「ああ待って」

「はい？」

「先に会計を頼むよ」

「どうして先に？」

「帰りに混んでたら時間かかるだろう？ 先に払っておいていつでも帰れるようにしたいのさ」

「後あとのことまで考えてるなんて素敵ね！」

「……ってな感じにデートは進展すると思うんだ、吉野家デート」  
以上清水の妄想でした。

「保護者、こいつの妄想が少しでも予想通りに行くとと思うか？」

「ありえませんか」

「……だよな」

男の俺（彼女経験無し）の考えだし、もしかしたら女とは考え方が違うのかなーなどという少しばかりの同情心は無駄だったらしい。

当然か。

「なぜに！？　これだけ知識をアピールしたというのにどうして？」

「先輩、事実を述べてもいいですか？」

「なぜ俺に確認を求める」

「……本気で言ったら、先輩に引かれるかもしれないじゃないですか」

「構わん、俺は気にしない。大体お前の毒舌は承知の上だし、清水は多少痛い目にあった方がいい」

「それなら言わせてもらいます。その人は反省しつつ聞いてください」

「わかった！　いくらでも聞くぜ！」

何そのナイスガイっぽい返事。叱られるのに。

それでは……と前置きしつつ、保護者は言葉を発した。

「まず吉野家に彼女を連れてくる発想が意味不明です。安い速い旨いが信条の店に気になる人を連れてくるって親睦を深める気あるんですか？　それに吉野家に詳しいって常連ですか。日頃の食生活がいか荒れてるかアピールしてるんですね、馬鹿みたいです。その上値段一緒でお米の量だけ少ないメニュー頼んで勿体ない。お腹がすいてないなら並でも頼めばいいでしょう、肉ばかり食べたいなんてどれだけ肉に飢えてるんですか。筋肉かもしれないですけどあなたの肉は常人以上なんですから自重してください。最後に会計を先にやるのは食い逃げに間違われる原因になるじゃないですか。デートでそんなことになったら馬鹿ですよ。知的とはあなたからもつともかけ離れた言葉です。異常ですが、総じて言うならこれは最悪です。センスないです。彼女が欲しいなら私のいない、一般人に迷惑がかからないあなたの頭の中でいくらでも声かけてください。誰か理想的な女性が引つかかるんじゃないですか？　心底興味ないんでどうでもいいですけど」

「うわああああああん」

あ、清水が泣いて去っていった。頑張れ清水、いいことあるさ。来世かもしれないけど。

「……どうでもいいけど会計は俺持ちか？」

「先に会計してませんでしたよね、あんなこと言っていましたけど」

……まあ、毒舌浴びせられたのは間接的に俺のせいだし、ここは払っておこう。

「しかしまあ……よく言っただもんだな。気に食わんことでもあったのか？」

「……先輩がそれを言いますか？」

確かに、用件も言わずに呼び出したりの俺だしな、申し訳ない。……そうだ。

「保護者、これから暇か？」

「暇じゃないならわざわざ来ませんよ」

それはよかった、なら……。

「今から映画にでも行こう」

「……え？」

「おごるぞ？ 見る映画も決めていいし……迷惑掛けたしな」

「え、ちょ、な、あの、いいんですか！？」

「俺が怒らせたみたいだしな……、嫌か？」

「嫌じゃないです！ 大歓迎です！ 災い転じて福となるです！」

「よし、じゃあ今から行くか」

「行きましょう！ 今恋愛映画やってきましたよね！？ 二人っきりで観賞しましょう！」

うんうん、機嫌を直してくれたみたいでよかった、それならもつと奮発して

「そんなに喜んでくれるなら、みんなも呼ぶか。義人とか石井とかタツミとかぶほあっ！？」

みぞおち入った！ みんなで楽しませようと思ったのに何故！？

「……余計なことばししないで、二人っきりで行きましょうね、せん・ぱ・い？」

「……行きましょう」

「わいです保護者さん。いやまじで。」

## 第五十二話 決闘

田村「……遂に決着をつけるときが来たようだな……」

三井「悪いがお前に勝利を譲るつもりはない、おとなしく……逝つてもらおうか」

田村「……笑止」

三井「上等だ……その減らず口、二度と叩けなくしてくれる!」

松田「二人の背中がゆらいで見える……」

杉田「まさかあれは……闘気!？」

浜口「この時代に闘気を扱えるものが残っていたとは……」

片山「知っているのか信也!」

浜口「闘気とは……む、動くぞ」

何がきつかけとなつたのか。風の音。空気の流れ。あるいはきつかけなどなかったのかもしれない。本能の赴くまま、全身全霊をただ一つの事。相手を消すことに集中した結果見えたのかもしれない。三井にとって有利な状況。今攻撃できるのは自分だけであるという事実が動かしたことも否定できず、逆に田村が誘つたとも言えなくはない。どちらの判断が正しいのか。それは戦いの後、同じフィールドに立ち続けていられたものが決めることである。今すべきことは一つ。全力を持って叩き潰す。それが礼義でありこの戦いの根源なのだ。

田村「うおおおおおおお!!!」

三井「あああああああ!!!」

石井「終焉の時か」

辰美「何してるの?」

全員「」「ドッジボール」」  
辰美「……………」

三井「いやー、いい汗かいたな。運動はいいものだわ」

タツミ登場でいい熱闘感こそ削がれたものの、ドッジは俺のチー  
ム勝利で無事終了。全く、県で表彰を狙う選手が情けない。本職は  
水泳でドッジと全く関連性がないけど。

辰美「……闘気とか何なの？」

なぜ冷めた口調なのだろう。あの頂上決戦、みたいな空気がいい  
というのに。やはり女子供に男のロマンはわからないものなのだろ  
うか。性別の違いとは斯くも大きな問題なのだ。嘆かわしい事象で  
ある。きっと本当の意味で男女がわかり合うことはないのだろう。  
残念。

杉田「それっぽい雰囲気が出ていいじゃん。内野に残った二人の一  
騎打ちだったわけだし」

松田「みんなノリノリだったなー、序盤でやられた主人公のライバ  
ル臭がプンプンしてたぜ」

片山「それにしても強いね、二人とも」

浜口「特にみっちゃんはなあ、運動神経ではこの中じゃ低いほうな  
のに」

杉田「ふふふ、旦那は小学校の時学年でも五指に入るドッジボーラ  
ーだったのだよ」

三井「なんだそれ」

杉田「中でも旦那のディフェンス技術は素晴らしいものがあるな」

石井「攻撃面ではアンダースローからの変則球が厄介だしねー」

松田「まあ、三井のまた無駄な面が見れたからよしとしよう」

三井「……どうせ俺の特技は無駄で役に立たんよ」



なぜ勝ったのに落ち込む羽目に陥ってるんだ、自分は。

## 第五十二話 決闘（後書き）

馬鹿馬鹿しくて何が悪いんですか！（逆ギレ）

## 第五十三話 ブログ

おのこもすなるとブログいうものを、われもしてみんとてするなり。ルリに誘われて初めてみたブログですが、今では私に相談しに来る常連ができるほどに興隆しています。ブログのタイトルはみさきち相談室（ルリが名付けたものです）。今宵も悩める子羊たちが、救いを求めてやって来ています。

FROM ラグビー部次期エース

おつす、みさきち！ 俺、女の子にもてたいんだ！ 頭も悪くないし運動神経抜群、女の子には優しくしている俺がもてないのはおかしいと思うんだ！ どうすればもてるようになる？ 教えてみさきち！

ANSWER みさきち

この文章一つをとっても、あなたの傲岸不遜、自意識過剰な態度がにじみ出ています。根本的な性格矯正をお薦めします。小学一年生からやり直してください。

FROM 学年唯一の常識人

最近、同級生から「優柔不断」「甲斐性なし」などといわれのないうちを浴びせられる日々が続いています。以前はそうでもなかったのですが……。どうすればいいと思いますか？

ANSWER みさきち

原因がわからないと対処のしようがありません。きつかけは何か思い当たりませんか？

FROM 学年唯一の常識人

そういえば、同時に二人の女子から告白をされた後、言われるようになったような……。告白の返事はまだしてないのですが、こんなささいなことが原因ではないですよ？

FROM ラグビー部次期エース

＜＜学年唯一の常識人

[illegible]ANSWER  
みさきち

## ＜＜学年唯一の常識人

日本語は正しく使ってください。いわれがあります。原因は間違  
いなくそれです。これからも「優柔不断」で「甲斐性なし」と呼ば  
れ続けてください。優柔不断で甲斐性なしな常識人かどうかも怪し  
い人。

ラグビー部次期エース

気持ちにはわからないでもないですが、荒らさないでください。あと、強く生きてください。

FROM  
ケンゾー

娘が冷たいんですが、どうにかありませんか？

A N S W E R    みさきち

物事には原因があるものです。嫌われるようなことをしたのでしよう。後悔しつつ態度を改めてください。ちなみに娘のブログに書き込む父親は最低だと思われます。おそらくそのようなことをしたら、より一層、親子間での交流はなくなるでしょう。世の中の親がすべて常識を持ちますように。

## 第五十三話 プロゲ（後書き）

漫研四人で十時間耐久カラオケにいました。すべてアニメ、ゲーム関連で歌いきったのに、帰ってみると歌えばよかったと後悔する曲が残ってる不思議。

## 第五十四話 黒

「子供のころって戦隊ヒーローにあこがれるよな、旦那！」

「俺はウル ラセブンとかタロウとかの方が好きだったから、じゃ」

「今面倒だと思って無理やり話を打ち切っただろ！？」

だって義人から俺を巻き込もうとするオーラが出まくってるから。これは乗らない手しかないだろう。

「中学の文化祭でも保護者ちゃん達がやってたじゃん！ ブームなんだよブーム！ 時代の流れに取り残されてもいいのか！」

「むしろ逆行してるだろうが。お前の精神年齢は小学生並みだとは思っていたが、保育園児並みだったとは驚きだ」

「男とは時に子供のような熱意を持つことがある馬鹿な生き物なんだよ」

「達観したセリフは、一度でも年相応な行動を取ってから言うんだな」

「ねー旦那、御託はいいから戦隊ヒーローごっこやろうぜー」

「やっぱ巻き込む気だったんじゃないか。……否定してなかったし当然と言えば当然か。」

「だから断ると……」

「旦那だってオーレ ジャーとかカクレンジャ とか好きだっただろ？」

「誰がさとう珠 やケイン スギが出た戦隊物を好きだったと？」

「よく知ってるじゃないか」

ちっ、ガキの頃の話じゃ仕方なからう。好きなものは好きだったんだ。

「じゃー俺が冷静沈着で聡明なブラックだな」

「分不相応にもほどがあるだろ」

ケイ コスギに謝れ。

「さあ旦那は不良少年の役をやるんだ」

「敵は魔物とか世界征服をたくらむ悪役ですらないのかよ……」

「へっへっへ、学校をさぼつての私服は最高だぜ」

「待てーい！」

「な、何だてめえは！？」

「ありとあらゆるものが黒！ キタブラック！」

「一体何の用だ！？」

「未成年の分際でタバコなんか吸うんじゃない！」

「俺の勝手だろうが」

「手遅れになる前に止めるんだ、後悔することになるぞ……俺のよ  
うに」

「？」

「肺もブラック、キタブラック！」

いやヒーローとして駄目だろそれは。

「まあ貴様のことなんてどうでもいいんだけどね、仕事でやってる  
だけだから」

最低だこいつ！

「腹もブラック、キタブラック！」

いちいち鬱陶しいなあ。

「（スッ）」

「なんだそれは？」

「PSPだ」

「それがどうした？」

「PSPのカラーもブラック、キタブラック！」

何の関係もねえ！ てか趣味の段階じゃねえかそれ！

「……冷静沈着はどこへ消えた」



「らきすたで好きなのは黒井なこ先生、キタブラック！」  
「もういいから」

## 第五十五話 謙三娘

とある休日、忙しさを枯渇しがちな読書欲を満たすために図書館へとやってきた。俺の身の周りは「読書？ 毎日読んでもよ、漫画で」（S田氏）や「文章？ 読んでもよ、ビジュアルノベルゲーム付きのゲームで。一般的にはギャルゲーとか言われたりもするけど」（I井氏）などという間違った人間ばかりのため、縁遠くなりがちなのである。そのため、そいつらが来ることなどないであろう安息の地で、たまの読書日を作るのが心の平穏につながる。ビバ読書。知り合いのいない状況でゆったりと時間を過ごす……なんと安堵できる瞬間であろうか。

「見たことのある顔だと思えば、三井先輩ではないですか」

「！？」

一瞬身構える俺。とうとう安息の地にも魔の手が来てしまったのか！？

「お久しぶりです、いつもルリと、不本意ながら父がお世話になっております」

「……なんだ健三さんの娘さんか」

「なんだとは失礼ですね。それに父の娘、という言い方はいい加減やめていただけませんか？」

これは失敬。

「でもなんて呼べばいいんだ？ 名字……山本さんか？」

「できれば父を連想するのでやめてほしいです」

健三さん泣くぞ。

「それなら下の名前か。保護者が呼んでたよな、えーっと？」

「岬です」

「岬さんでいいのか？」

「結構です」

それはよかった。しかし女子を下の名前で呼ぶのは気恥ずかしい

な、うん。

「……ところで、三井先輩は何をしにここへ？」

「そら読書だろ」

「……そうですね、愚問でした」

まあ、勉強しに来る人も中にはいるけどな。俺から見たら本だらけという誘惑の中よく集中できるなと思うわけだ。

「しかし……岬さんは何を読んでるんだ？」

「これですか？ > 破戒<です。やはりこういった小説は考えさせられますね。素晴らしい作品だと思います」

「あー……」

「時代を感じさせられる場面もありますが、人の機微についても読み手に推察させる点がいいですね」

意気揚揚と語る岬さん。なかなかのものだとは思うが、俺は彼女にある意味残酷な事実を突きつけなければならなかった。

「……一言いいか？」

「はい、なんでしようか」

「その本、健三さんも薦めてた」

「……！？」

あ、固まった。

「ま、まあ気にすることは無いと思うけど。きっとあれだ。同じ家で暮らしてるんだから性格が似てくるのは当然なんだよ」

「そ、そんな……」

絶句とはこの様子を言うんです、と教科書に載せたいくらいだな、この光景。

「客観的にみるとかなり親子で似てると思うけど、頑張れ」

「て……訂正してください！」

「おう！？」

いつも冷静な印象があった岬さんだが、逆鱗に触れたようだ。逆鱗が健三さんに似ている、という点であることが不憫でならない。

「ちよ、落ち着いて、ここ図書館！」

「三井先輩が訂正してくださったら今すぐにでも！」

頬を紅潮させて俺に迫る岬さん。ち、近い。

「ですから私と父では何もかもが違うんです！ 同じなのは苗字と血液型くらいなんです！」

血液型も同じなのか。ああ、この子も感情を表に出して怒ることもあるのかー、近くで見ると可愛い顔してるんだなー、眼鏡外せばいいのにー、などと気押されながらも現実逃避気味なことを考えていると。

「……何してるんですか、先輩、岬……？」

般若の顔をした保護者が立っていた。

話を聞くと、もともと二人で来ていたらしく、俺が岬さんに見つかつたときは偶然「お花を摘みに」行っていたそう。戻ってくる俺、岬さんが顔を突き合わせていたから切れかけた、とそう言うわけらしい。

「先輩、岬とキスしようとしていたとか、そういうわけではないんですよね？」

「ない」

「そうです。少し熱くなっちゃってつい……」

保護者の声を聞き、冷静になった岬さんは驚くべき反応速度で俺から離れた。今も若干距離を置かれていることからしても、怒らせてしまったようだ。

「先輩、からかったらいけませんよ？ 何か岬に一言あってもいいんじゃないですか？」

じと目で俺を見る保護者。こちらはまだ疑っているのだろう。少しは信用しろ。

「そうさな……」

そう言われると何かしたくなるのが人間というもの。

「岬さん、近くで見ると可愛いね」

「な」

「可愛いんだから、眼鏡外したらいいのに」

「……はう……」

「機械的に無表情を作るんじゃないくてさ、さっきみたく感情を表に出して……ってうおう!？」

「せ・ん・ぱあ・い？ なに口説いてるんですかあ？」

笑顔が怖いよ。戦車が裸足で逃げ出すくらい怖いよ。

「じゃ、じゃあな二人とも、また今度!」

三十八計逃げるが勝ち。これは敗北ではない、戦略的撤退なのだ。

「あ……。ちつ、先輩を逃しました」

「……」

「岬？」

「ルリ」

「どうしたの？」

「……私、男性にあんなこと言われたの、初めてです……」

「っ」

後日譚。

「……娘が別居したいと言い出したんですが、どうしたらいいんでしょうかね」

「……あれ？もしかして俺が原因？」

## 第五十五話 謙三娘（後書き）

十二時間耐久カラオケ（アニソンしぼり）誕生パーティーは死ねますね。しかも途中なぜか巫女服に着替えさせられたりするオプショ  
ン付き。誰かあの写真を消去してください。

## 第五十六話 疑惑（前書き）

エロゲ規制とか日本政府はどうなつとるんですか。趣味を批判するとか意味がわからないのですよ。それより先にパチンコとか酒とかタバコとかを規制しろと（ry

## 第五十六話 疑惑

教室で一人、ゆるりと過ごすのもよいものだ。いつもは喧騒の中心にすることが多いが、こうして周りの級友が各自グループを形成して笑顔を見せる姿などを観察すると、平和を実感する。たまにはこうして何も無い一日を過ごすのも

「なおくん、ロリコンって本当なの!？」

……どうせ何か起こると思っていたよ、今までの経験からして。

「答えてなおくん! 高校一年でロリコンってことなら趣味は小学生!？」

「とりあえず大声をあげるのはやめてくれ、注目を浴びる」

そんな大声出されたら、ああやっぱり皆こっち見てるし。ロリコン連呼するな、ロリコンの疑惑がクラスで広がること確定じゃないかこの野郎。……女の子だから野郎ではないか。

「まさかそれ以下の年齢層!? ダメだよなおくん、ロリコンは犯罪だよ、矯正しないといけないんだよ!？」

「お願いですから黙ってください俺が変人だと思われるじゃないですか勘弁して下さい」

……ああ、俺の築いてきたイメージが音をたてて崩れているような……。

「安心しろ旦那、今このクラスで旦那を常識人だと思っている人は皆無だ」

「貴様が原因か義人!？」

「来るや否や濡れ衣だと!? おれの信頼度はそこまで低いのか!？」

「信用してるぞ、間違いなくお前が元凶なのだろうこのトラブルメーカーが」



「そんな信用いらない！」

「しかも俺が変人だと！？ 誰がそんなことを言っただけやがる！」

「クラスの総意だ」

「ぺら、と出されたのはアンケート用紙。……なるほど、これはクラス全員がおかしいからこういう結果なんだな。間違っているのは俺じゃない、世間だ。」

「そうだよなおくん、性癖を明らかにされて動揺してるのはわかるけど落ち着いて！」

「俺のタツミに対する信用度も、着々と減少中だ」

「どうして！？」

「答えは簡単、ロリコンじゃないからだ」

「というかなぜタツミにこうまで疑われてるんだ？」

「でも噂になってるし……」

「誰から聞いた？」

「清水君」

よし、紳士的な報復に出よう。

「うわあああああああ！！！」

「どうしたの清水ー？ 周囲を引かせるほど号泣してー」

「こ……これを見てくれ」

「んー、アンケートー？ 『彼氏にしたい人ランキング』ー？

清水がダントツ一位なだけじゃんー。これがどうかしたのー？」

「今まさにお前が答えた内容が原因だよ！」

「こんなの単なる事実じゃないー」

「ちくしょおおおおお！！！」

「……思い知ったか清水」

「三井！ なぜこんなに（俺にとって）惨いことを……」

「自分の胸に聞け」

## 第五十七話 真実

「さあ、吐け！ 貴様が元凶であることはすでに聞き取り調査済みだ、清水！」

「だ、だが待つてくれ刑事さん！ 俺は決して根も葉もない憶測を言ったわけでは……」

「……ふう、こんなところで素直に罪を認めないお前を見たら、お袋さんはどう言うだろうな……」

「な……！ お袋は関係ねえだろ！」

「ふふふ…… お前がこのまま否認を続けるようなら、家に報告せざるを得んな。……子が嘘をついていると知った家族の悲哀……。俺も見るには堪えんが是非もあるまい……」

「お袋…… 俺はお袋に嘘なんか吐きたくはないんだ！ 中学時代……

いや今だって苦勞をかけてるのにこれ以上は！」

「ならわかるだろう……？ 君のなすべき行動が……」

「くっ卑劣な……」

「さあ吐け！ この私をロリコン呼ばわりしたその理由を！」

「り…… 理由は三井がもてるのが羨ましくて悔しかったから……」

「俺のどこがもてるって？ はは、冗談はよしてふぐっ」

「……… なおくんのバカ」

「お、俺がいったい何を言ったと……」

「知らないっ！」

「……ど畜生があ！ ひとつとるそばから何ラブコメしてるんだよくソツたれ！」

「清水ー、ここは泣いてもいいと思うよー」

「うつ、うつ」

「なんか俺が悪いみたいな流れに……」

「反論はできんな、旦那」

「……まあいいが、結局それで根も葉もない噂をばら撒いたのか？」

「うつうつ……根も葉もないわけじゃない……」

「なんだと!？」

「杉田が……三井はロリコンだつて言つてた」

「やはり貴様が義人　　!!!」

「待て待て、俺はそんなこと言つてないぞ？」

「そんなことはない！　確かに「旦那は小さい子が好きだ」と

「

「義人、返答の次第によつては今後不自由な生活を余儀なくされる  
が異論はないな？」

「ありまくりだよ！　てか清水俺のその発言はあれだ、「旦那は小  
さい仔が好きだ」つてことだ！」

「同じじゃねーか」

「子と仔の違いだ！　旦那がその林から出てきたイタチ抱いて頬  
を緩ませてたから！」

「……………」

「……………」

「紛らわしい発言するんじゃないやねえよ!!!」

「……わ、私は初めからなおくんを信じてたけどね？」  
「嘘だつ!！」

数日後。

「旦那ー、また旦那がロリコンつていう噂が広まつてるぞ」

「この前の発言が後を引いてるのか……厄介な」

「いやいや、それとは別に……」

「三井が図書館で中学生口説いてたつて噂がー」

「……オボエテナイヨ、タダノウワサジャアリマセンカ」

「動揺しすぎだろ」

「わかりやすいねー」

「  
……  
ふん、  
だ」

## 第五十七話 真実（後書き）

地の文が面倒くさかった……なんてことはアリマセンヨ？

## 第五十八話 ジャンプ漫画

今日も今日とて同じメンバーでの雑談。まったくもって暇な連中である。進歩はないのか、飽きはしないのか、まったくもって理解不能である。

「何ブツブツ言ってたんだ、旦那？」

「……いや、単なる自己嫌悪だ、気にしないでくれ」

「ジャンプ漫画で一番燃えるのはドラゴンボールだよな！ 格が違う」

「ミニバスやってた僕からすると、スラムダンクは外せないよねー」

「ふん、まだまだだな二人とも。歴史に残る燃え漫画の傑作を忘れるとは。それでも一介のオタクと言えるのか？」

「自称オタクではない旦那がそこまで言うとは……。ここでワンピースとかブリーチとか言ったら、少し旦那を見る目が変わるぞ？」

「具体的にはどんな風に？」

「>オタクであることを否定しているものの、実はかなりこっち側の人間<から>こっち側の人間なのに一般人ぶる常識人（笑）まがいの人間<へとシフトチェンジする」

「現在の評価も十分悲惨じゃねえか！」

「おやおやー、そんなにむきになっちゃってー」

く、これ以上反論しようにも、すればするだけ俺の印象が悪い方向に行くことになる。かといって何もしなければ、ただひたすらに変なイメージが残ってしまう。なんて巧妙かつ悪辣な手口なんだ……。幽々白書に出てくる閻魔大王（コエンマの父親、ごつい）でもここまでの非道はしまい……！

「旦那、無理にジャンプネタに走らんでもよかつ」

「そつだな。俺もちよつと無理があると思つた」

お前の発言を否定したいのは本気だが。……いやマジで。

「それで、三井が勧める燃え漫画の傑作はー？」

「To loveる？ いちご100%？ E's？」

「なぜ青少年がもし好きでも「べ、別にこんなのに興味ねーよ」と思わずツンデレなセリフを吐いてしまふ漫画を選んでしまった」

「ボーボー？ ミスフルー？」

「ギャグ漫画じゃねえか」

「旦那の中ではミスフルはギャグ漫画なのか……」

正直野球シーンはいらなと思うんだ。ギャグマンガなのに熱くなる筆頭は世紀末リーダー伝たけしだが、その対局はミスフルと言つていいだろう。野球漫画？ ルーキーズでいいんじゃない？

「他何かあつたっけー？ 黒ネコさんとかー？」

「ガンアクション漫画を宅急便みたく呼ぶな」

「ブリーチとかナルトか？」

「もう完結した漫画だ」

「ターちゃんとかマキバオーとか」

「それもあつたな、だが俺の中ではそれ以上に燃える作品だ」

「筋肉マンー？」

「チヂミマンとかいるんだぜ？ 名前のノリがラッキーマンと同じレベルだろ」

これは大場つぐ……ガモウひろしが真似したというべきか。

「サラブレッドと呼ばないで？」

「覚えてる人いるのか」

確かに良作だったけれども。

「てかお前らほんとに忘れてんのか！？ 傑作があるだろう、>ダイの大冒険くという傑作が！」

ポップの成長っぷりとか格好良さとか、あれは言葉じゃ語りつくせんほどだろ！

「これだからお前らは、萌えに走つて本質を忘れてるんじゃないの

か？ 少年漫画、ゲーム原作の漫画の最高峰だろうに……」

これは二人とも説教コースだな。みっちりとシグマの男前っぷりについて指導せんと……。

「てか旦那」

「どうした？」

「今まさに旦那がオタクっぽい」

「……………」

……………なんてこったい。



## 第五十八話 ジャンプ漫画（後書き）

今月は飲み会で後輩を奢らないといけない（8000円）のに、北方謙三の楊令伝を大人買い（八巻、5000円）してしまうという。衝動買いって怖いですね！ 来月はパワポタも買わないといけないのに……。

## 第五十九話 意識

目が覚めるとそこは、見知らぬ部屋でした。

「……落ち着け、俺」

こういう場合、自分を見失ったら負けだ。冷静に状況判断をすることこそ大事。慌てても事態は好転しない。どういうわけか今ここにいる理由、昨日何があったのかが思い出せない。

「……まず俺が寝ているのは……ベッド？」

当然俺のものではない。布団の色は薄い桃色、シーツは白で若干いい香りがする。

次に部屋全体をしてみる。派手なものは見当たらず、目についたのはぬいぐるみや背表紙がピンク色な漫画。……要するに少女漫画である。このことから女性の部屋であると推測される。

姉ちゃんの部屋ではないか？ いや、奴の部屋は見覚えがあるし、少女漫画などない。あるのは餓狼伝などの格闘漫画だ。

「ふむふむ、ようやく頭が冴えてきたぞ……」

とりあえず言えることがある。というか叫びたい。

「ここどこだ！？ なぜここにいる！？ どうすればいいんだっ！？」

……俺全然冷静でないな。（逆境×）

冷静さを取り戻す前に足音が聞こえてきた。鬼が出るか蛇が出るか……。

「なおくん起きた？ 大丈夫？」

辰が出た。

「おはようタツミ、……大丈夫とは？」

「それは、昨日の……あの、さ、気にしないでいいからね？」

「何が!？」

「私はその、別に嫌じゃなかったし……」

「だから何が!？」

「なおくんなら寝ても……うっん、なおくん以外には許さなかったと思う」

「ちょ待て! 昨日いったい何があった!？」

「寝る!？」

「それじゃ、朝ごはん出来てるから、それだけ!」

「言いたいことだけ言って消えるな                   ! 説明を、説明をしてくれ!」

「誰か、俺に真実を! 真実をくれ!」

「あらあら、朝から元気ねえ?」

「望さん!？」

「救世主あらわる! 望さんとはタツミの姉にして俺の姉ちゃんの親友、俺の知り合いには珍しい割と常識をもった人である!

「お久しぶりです、どうして俺はここに!？ ここはタツミの家……てか望さんの家ですか!？」

「そうよー? でもお久しぶり、でもないのよ? 昨夜会ってるんだから」

「……どういうことです?」

「まあ、それはさておき、直くん?」

「はい?」

「タツミのベッドの寝心地はいかがだったかしら?」

「満面の笑みを浮かべ、俺に訪ねてくる望さんは小悪魔にしか見えなかった。」

「……ノーコメントでお願いします」

「この人は、俺の幼少時代、姉と二人で俺をおもちゃにしていたのである。……だから、いい香りがする、と思ったなど言えば、かわれることは疑いようがない。」

「そう? 直くんを寝かせると決めてから、辰美が慌てて部屋を片付けてたのよ?」

それを聞いて俺にどうしろと。

「のぞいて見たら、「なおくんがここに寝るんだ……私のベッドで……はう……」なんて言って一人赤くなって布団抱きしめてるし？寝かせた後はベッドの横で「……添い寝とか……何考えてるの私！？」とか妄想してるし？ 何か一言くらいあっても罰は当たらないんじゃない？」

「……あの香りはタツミの……」

「あらあら？ 香りがどうかしたの？ お姉さんに話してみなさい？」

「……っ、なんでもないです、気にしないでください！」  
「顔真っ赤よ？」

……不覚……！

## 第六十話 前祝

「……ではお荷物確かにお届けしました、またのご利用をお待ちしています！」

「……はあ、ご苦勞様です……」

無暗に元氣な配達員の声を聞きつつ、呆然と立ち尽くしていた。俺は突発の事件に弱い。だから>突然<>姉ちゃんが<>推定20kgの荷物を<>俺宛に<送ってなどきたら、脳がフリーズを起すのも当然なのである。

「……とりあえず姉ちゃんに電話しよう……」

結局、いくら考えても思いつかないので、当人に確かめてみることに。宅配物を開けてみる、という選択肢は、私物だったら物理的な話し合いという名のリンチに早変わりするので却下。プライド？ そんなものの命の前では値打ちなど無きに等しい。

……そもそも、姉ちゃんと会話すると精神に多大な負担がかかるから、あまりしたくはないのだが、是非もない。……鬱だ。

「もしもし直樹？ 届いた？」

「荷物のことなら届いたぞ、なぜか俺宛で」

「そりゃー当然よ、だってあんたへのプレゼントだもん」

「プレゼント？」

「あ、もしかして早すぎた？ でも一週間前だもんね、許容範囲内でしょ」

「あー、つまりこの宅配便は……」

「そ、あんたへの誕生日プレゼント」

「……とまあ、俺は自分の誕生日を忘れつつたわけなんだ」  
「おいおい旦那、痴呆か？」

「自分の誕生日忘れるとかー、末期だよなー」

やかましいわ。意外とへこむぞこの野郎。

「で、親愛なる旦那の御姉様からの贈り物はなんだったんだ？」

「相当重かったんだよねー？ 段ボール一杯の札束とかー？」

「怖いわ！」

実際そんなもん送られてきたら、姉ちゃん相手でも警察に通報するだろ。どう考えてもまともな金じゃない。

「違うよな旦那、20kg分の米とかじゃね」

「何が悲しゅうて、年に一度の誕生日に米を貰わんといかんだ」  
ダンボール開けたらコシヒカリとか笑えねえよ。

「じゃあわかんないやー、」

「降参だ」

「お前らの発想力には重大な欠陥があるとしたか考えられん……」

脳外科に行ったら多少良くなるかもしれん。……いや、医者が匙  
投げるレベルだろうな。

「で、貰ったのは？」

「ダンベル」

「……………」

「あー」

……姉ちゃんが俺に何を望んでいるのかわからない。

同時刻、同クラス。少し離れた席で聞き耳を立てる少女が一人  
いた。

「……そっか、なおくんの誕生日、もうすぐなんだ……」

「辰美、おーい、話聞いてるー？」

「……インパクトが大事だよー……」

「……だめだこの娘」

## 第六十一話 スタバ

晴れた日の昼下がり、私たち三人 私、ルリ、石川先輩はスターバック の店内で話し合いをしていました。

「……ここに呼び出した理由、わかるかな？ 瑠璃ちゃん？」

若干の寒気がするのは、室内の温度が低いだけではないでしょう。

……具体的に言うとは怖気のようなものでしょう。おそらくルリはこの空気になることを予期していたと思われます。そうでなくては「石川先輩とお茶しに行くから一緒に来ない？ なんなら奢るよ？」

とまで言って私を連れてきた意味がありません。そうでなくても私とルリは、四六時中一緒にいるのですから。あまり石川先輩のことを知らない私を連れてくることで、態度を軟化させようとしたのでしょう。効果が上がっているとは考え難いのがつらいところですが。

「その様子ですと、知ってしまったようですね……先輩の誕生日を……」。先輩……というと、三井先輩のことでしょうか……？

先日……その……私に……「可愛い」などと言った……。

「その様子だと、忘れてた、ってことじゃあないみたいだね？」

「この私先輩の誕生日を忘れるとでも？」

……そうですか……三井先輩の誕生日……。

「教えてくれてもよかったんじゃないかな？」

「聞かれませんでしたからね。少なくとも先輩を争うという点での敵に、わざわざ塩を送るメリットはありませんので」

……別に、私が日ごろの感謝をこめてプレゼントを渡しても、不自然ではありませんよね……？

「まあ、別ルートで知ることができたからいいんだけどね？ ここだけの話、なおくん女性からプレゼントもらったらいいよ？」

「なっ……！？ どのどいつですか！？ 先輩を狙う女狐は！？」

……でも、男の人が貰って喜ぶようなプレゼントとは、どのようなものでしょう……？ ……好感をもたれるような……。

「ふふふ、瑠璃ちゃんも黙ってたでしょ？ だからこれでおあいこ」  
「くう……気になります……」

……三井先輩も読書家とのことですから、本はどうでしょうか？  
しかし持っている本を渡されても困るでしょうし……。

「で、瑠璃ちゃんは何あげるの？」

「……杉田先輩にお菓子の指導を受けているので、ケーキをあげようかと」

本人に聞くとというのは？ しかしそのことで気を遣わせても……。

「ああ、それいいね！ 私も何かお菓子をあげようかな？」

「石川先輩がそれをするのはやめた方がいいと思いますよ？ 被るからというだけで他意はありませんが」

……男性に物を渡すなど、あの父親以外経験がないのが悔やまれます。

「ああごめん、岬ちゃん無視して二人で話してたね」

「岬、どうかしましたか？」

「……男性にプレゼント、何をさしあげればいいのでしょうか？」

……好感をもたれるようなものという……」

「えっ!？」

「はい!？」

……この二人はなぜそんなに驚いているのでしょうか。



## 第六十一話 スタバ（後書き）

なぜ俺は

テスト期間に

書いている

## 第六十二話 苦悩

石川家にて、一人の少女が悶々と悩んでいた。

「なおくんが興味を持つてくれるプレゼント、何が最適だろう？」

なんでも喜んでくれそうな気もするし、嬉しそうにしても内心はそうでもないかもしれない。まして再会してから初めての贈り物、妥協はしたくない。お金をかけるのは気を遣わせるだけのよう  
な気もするし……。

「男の子って何を貰うと喜ぶのかな？ ……そうだ」

……知り合いの男の子に聞いてみよう。そう、なおくんといつも一緒にいるような……。

所変わって古木家。ここにも悩める少女が一人。

「そもそも先輩が去年までに私の気持ちに気付いていてくれれば……」

今年は初めて、先輩を争う本格的なライバルともいえる存在が現われてしまった。中学時代は、私が先輩の周りを見張っていた甲斐もあって、そこまで先輩を狙う人はいなかった。先輩の魅力に気が付かけた人には、先輩の恥ずかしい、百年の恋も冷めるような姿を見せることでご退場いただいた。……そういう悪戯をしたから、私の気持ちを気づいてもらえなかったとも言えるが、今はそれを悔やんでも仕方がない。

「……石川先輩は、確かにいい先輩だと思う」

周りに気を配ることもできるし、温厚篤実な性格は私から見ても魅力的だ。……でもだからといって。

「……胸に無駄な脂肪をあんなにつけている人に、先輩を取られた

くない……っ！」

なんとなく決意を新たにした。

そしてもう一人、まじめな故に考えが迷宮入りしている少女がいた。

「男性が貰って喜ぶもの……？ でも男性に相談できる知り合いだなんていないですし……」

自分ひとりで考えたところで、答えは出ないのではないのでしょうか？ そんな気がしてきました。

「……そもそも私には、男性に好かれるための方法なんて、習得する必要がなかったのですから……」

と、そこまで考えたところで赤面する。三井先輩に好かれるため、などという思いが心の奥にあつたことに気付いたからである。

「……別にそういう関係になりたい、というわけではないのに……。しかもルリの思い人ですよ？ ……これはきつと気の迷いです。あくまでも曰ごろの感謝の気持ちを表すプレゼントなのです……」

普段はいくら考え事しても痛くならない頭が、今日に限って痛い。やはりこういうことは私一人で答えの出せることでは……。

「……一人、いましたね。身近で、一応相談できる男性が……」

あまり相談したくはないのですが、背に腹は代えられません。すぐに聞きに行くことにしましょう。

「……娘が男性への贈り物について相談してきたのですが。私としては、一度でいいから「お前に娘はやれん！」と言ってみたいのですが……。しかしこの言葉をいう日が来てほしくはないですねえ……」

授業しろよ。

## 第六十二話 苦悩（後書き）

十時間半、男二人でカラオケで歌い続けたら喉が潰れた件

## 生誕祭（前書き）

誰も期待しなくなったであろう今になって投稿。

## 生誕祭

「誕生日おめでとう旦那！」

朝自宅マンションの駐輪場に行くと、珍しく義人が先に来ていた。いつもは奴の家までおこしに行かないといかんくらいなのに……まあ理由はあれだろうが。

「……聞きたいことがある」

「おやおや？　旦那が怒っているのはどうしてかな？　まるで嫌なことでもあつたみたいじゃないか」

「その言葉を冗談でなしに言っているのなら褒めてやる」

「ナンデオコッテイルノカワカラナイヨ」

はいはい棒読み棒読み。

「……なぜって？　……教えてやるよ……」

一呼吸置いてから義人の耳元で叫んでやる。

「貴様が深夜三時に携帯アラーム設定なんかするからだ……！」

耳元で突然「ハッピーバースデー旦那！　ハッピーバースデー

旦那！」なんてアラームをされて

「うるさいぞ旦那。近所迷惑だと思わないのか」

その言葉そっくりそのままお前に返してやる……。

「だいたい誕生日を生まれた日時に祝って何が悪い」

「少なくとも俺の心臓と安眠に悪い」

「微々たるものだ」

……なぜここまで上から目線でものを言うかなこいつは……。

「温厚な俺でもしまいには怒るぞ？」

ニヤニヤ笑いやがって……。

「なら聞くけど、どうして三時、アラームで起こされた直後に怒りの電話を俺にかけなかったんだ？」

「……それは……」

「なんだかんだで祝われて嬉しかったんじゃないのか、ん？」

……………。

「それにもう少し理由があるだろ？　言ってみろ」

「……朝弱いお前が熟睡してるのを起こすのも気が引けた、それだけだ」

「先輩！？　何照れてるんですかぁーっ！？」

「なおくん！？　同性愛は非生産的だよその道に進んじゃだめだよ！？」

うわびつくりした！

「保護者にタツミ、どうした藪から棒に出てきて？　学校あるのに何やってんだこんなところで？」

道に迷った……わけではないよな、当然。毎日歩く道を間違えてここに来てしまったなら、なかなか力オスではあると思うが。

「密かに誕生日プレゼントを渡しに来てみたら、こんなことに……！」

「非生産的だよ！　なおくん×杉田君は高城さんの描く同人誌の中だけで十分だよ！　現実でやっちゃだめだよ！？」

「今なんか聞き捨てならんことが聞こえてきたぞ！？」

俺の知らないところでいったい何が！？

「とりあえず皆落ちつけよ」

……正論だが、元凶の義人に言われるのが納得いかない。

落ち着いたのはいいものの、女子二人の様子が何やら険悪だった。

「……石川先輩もずるいですね、どの道教室で会うのにわざわざこんなところまで来ているなんて。歳を重ねたあと一番に会いたかった……とかそんなのですか？　だとしたら随分乙女チックですねえ」

……毒舌だな。俺以外に嫌みを言うのは珍しい。

「……とか言いながら、古木さんも来てるじゃない……。杉田君もいるし……二人で登校したかったのに……」

……空気が悪い、だれか換気してくれ……屋外だけど。

「旦那、誕生日なんだしテンション上げていこうぜ！　そういえば清水が旦那は大きいのと小さいのどっちが好きか聞いてたぞ？」

なぜか保護者とタツミの眼が光った気がする。

「……何の大きさが？」

「やだなあ旦那、それを女性がいる前で聞くのはセクハラだろ」

「つかぬ事を聞くが、それを今ここで聞く必要は？」

「皆無だな」

だれか槍持ってきてくれこいつを突き刺すから。

「……………」

……さっきまで二人で言い合ってたのに、黙ってこっちの話に耳澄ませてるし。

「……そうだな！　平均、そう普通くらいがいいんじゃないかな！

うん、それに特定部位で女性を判断するのはよくないぞ、うん！」

「おやおや？　その大きさと女性を判断するなんて俺は言っていないぞ？」

「混ぜっ返してんじゃねえよ！」

「普通がいいそうですよ、大きい石川先輩」

「平均がいいそうだね、小さい古木さん」

ちなみに背の大きさは二人とも平均からプラマイ五センチ以内であるため、そこまで大きさが変わることはない。

「……なにやら針のむしろにいる雰囲気だ……」

「旦那が気の利かない返答をするからいかなのだよ」  
うるさい黙れ。

「ルリ？　こんなところにいたのですか……学校に行きますよ？」

「健三さんの娘さんの……岬ちゃん？　……ああ、保護者を迎えに来たのか」

「！？　三井先輩！？　……あ、あの……お誕生日、おめでとございます……」

どうして知ってるのかを聞くのは野暮だろう。

「ありがと……どうしたんだそこ二人は？」



見事にフリーズしとるな。

「わ……私もまだ言っていないのに！ どうして岬が先に言ってるんですか！？」

「私もまだ……なおくん誕生日おめでとう……」

「あぁー！ 抜け駆けは卑怯です！ 先輩！ 誕生日おめでとう  
ございます！」

「……ありがとう」

そついや言われてなかった。割と結構ここにいるのに。

「旦那旦那」

「何だ義人」

耳元でささやかな気持ち悪い。

「……健三さんの娘さん、大きさが普通くらいじゃね」

「……」

つい胸に目が行ってしまふ俺。

「……っ！ あの、三井先輩……あまり胸を見ないでください……  
恥ずかしいですから……」

「っすまん！」

制服の上からとはいえ無遠慮だった。顔を赤くしながら胸を隠すようにする岬ちゃんは可愛くもあったが。

「旦那、やーらしい」

お前とはいつか雌雄を決しなければならぬようだ。

「……」

「……」

「……さあ、学校に行かないとな！ 遅刻するのは勘弁だし！」

沈黙を保ったまま、突き刺すような視線を浴びせてくる二人から逃げるようにして登校した。……なぜ誕生日なのにこんな気まずいのだろうか……。

## 生誕祭（後書き）

忙しい二ヶ月でした。コミケとかバイトとかバイトとかバイトとか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1219f/>

---

ええじゃないかさん

2010年10月22日13時36分発行